



* 0007089000 *

0007089-000

a 364-57

アジアを攪乱する犹太人

井東憲・著

雄生閣

1938

ABG

アジアを
機軸とする
日本人
井東 寛著



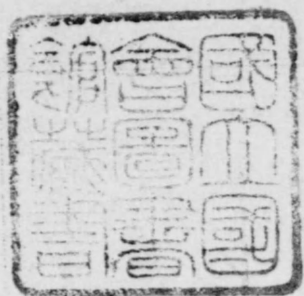
アジアを
機軸
する
日本人
井東 憲著



井 東 憲 著

アジアを攪亂する猶太人

東京雄生閣版



13794

序

猶太問題と言ふと、何か架空の問題か、人種的偏見かなぞのやうに誤解してゐる人がある。これこそ大きな間違ひで、猶太問題こそ、吾々の直ぐ足許へ押寄せて來てゐる國際秘密力であつて、これ以上に現實な問題はない位のものである。

猶太人は、一體世界をどうしようとしてゐるか、日本にどんな働きかけをしてゐるか。既に、英米佛は、猶太の帝國、少くとも猶太の勢力の許にあると言はれてゐる。

第一次世界大戰を企んだのも猶太であるし、ロシア革命をはじめ、凡ゆる共產主義革命の裏には、彼らの魔手が動いてゐると謂はれる。

ヒットラー氏の卓見に俟つまでもなく、猶太人は世界平和の攪亂者であり、

世界赤化の陰謀家である。カイザーをして、世界大戦を惹起せしめたのも猶太人であるし、その間ロシア革命を達成せしめたのも、又ドイツを最後まで叩きのめしたのも、平和會議の委員も、國際聯盟の委員も、凡て猶太人である。勿論オースタリアとドイツやフランスを赤化したのも、猶太人である。

洵に、怖るべき、憎むべき國際秘密力であつて、たとへば今次の支那事變の背後に躍るものは、凡て猶太的のものばかりだ。

これが、草を分けても研究すべき、重大問題でなくて何であらう。正體がはつきりしなければしない程、彼らの秘密は大きく深いのである。

日本こそ、アジアこそ、猶太に穢されてはならぬ。

私たちは、人種的民族の偏見などは、少しも持つてはゐない。猶太人の凡てを打倒するものではなく、世界の平和を亂し、人類に向つて飽く事なき慘虐行爲を續け、正義仁徳を泥靴で踏み蹂る猶太人を、排撃するのみである。

この小文は、こゝ三四年間に、機會ある毎に發表した文章の一部を纏めて見たものである。

今次支那事變が、皇國に取つて、どれ程の重大性を持つかを識つてゐる人々は、少くともその背後の猶太問題を眞剣に取上げるであらうと思つたので、どちらかと云ふと、この問題の研究では、素人であらう私が、敢て本著を上梓して大方の諸賢に、訴へた次第である。

同潤會鶯谷アパートにて

著

者

昭和十三年戰勝の冬

目次

序……………(一)

小説篇 (第一部)

香港の陰謀……………(三)

地獄から来たユダヤ人……………(三一)

戦争の製造家……………(三九)

評論篇 (第二部)

支那に喰ひ付いたユダヤ財閥.....	(五七)
新興アジア民族論.....	(六六)
日本の思想界を攪亂したるユダヤイズム.....	(八七)
支那の反ユダヤ教徒の動き.....	(一〇〇)
對日長期抗戰の不可と極東の將來.....	(一二三)
支那の遷都抗日策をめぐる國際秘密力.....	(一二五)

小說篇

(第一部)



香港の陰謀

1 武器輸入に踊る群

香港は、美しい詩のやうな街である。

港から、ビクトリア峰まで、鬱蒼たる樹木に蔽はれ、その間に西洋菓子のやうな建物を並べた眺めは南支那海から生れた御伽話の島のやうだ。

今朝長雨が上つたばかりの時は、山の街が艶々しい緑に映えて「夢の島」とでも題した名畫でも見るやうであつた。が、正午になると、未だ夏の威力を失はない太陽に抱擁されて、輝やかしい黄金の山と化して了つた。そして、夕暮が來ると、白乳色の海を前景とし、大陸

的な陽朱の空を背景とした香港は翡翠からオパールに暮れて行つた。

やがて、夜が來、ビクトリア全山に燈が入ると、まるで星の國のやうに美化されて仕舞ふ。静かで、平和な香港……。

けれ共、この詩の島香港は、實は英國の支那征略の玄關であり、東洋政策の根據地であると共に、今や、英國の對日戰備の「武器の街」なのである。

港には、遠く、深く、英國の驅逐艦、巡洋艦、潜水艦が、日本を假想敵國としてずらりと威容を誇示し、九龍^{タイロン}近くには、巨大な航空母艦が空を睨んで控へゐる。

そして、九龍の埠頭から廣九鐵路の構内に掛けては、抗日支那軍向けの軍需品が山と積まれ、それを守備するスコツトランド兵やアイルランド兵や、植民地兵が、蟻のやうに右往左往してゐる。

又、啓德飛行場や英國飛行學校から舞ひ上つた飛行機が、軍需品で腹をふくらませた汽船や水雷艇の頭の上から、飛行場背後の城門ダム、遊樂地、それからトーチカ地帯、砲門地帯へかけて、盛んに飛んでゐる。

矢張り、香港は抗日に燃えてゐる。

それは、北支の抗日支那軍が、全面的に惨敗し、上海既に危ふしとなり、廣東香港へ向つて、歐米人、支那人のブルジョアが避難民となつて殺到して來ると共に、益々激しくなつて來た。

香港の英國人は、丁度香港風景のやうに、ゆとりのある紳士を氣取つてはゐるが、自分の野望の魔手の一本である粵漢線を、日本空軍に猛爆される度びに、神經をびりびりさせ、重い舌打をしてゐるのである。だが、老獪な彼らは、自國の植民地製の葉卷を鷹揚にくゆらせで、靜かに紫煙を吹いてゐるのだ。

だが、その眼は輝き、顎は微かに動いてゐる。英國の財閥即ちユダヤ財閥は、阿片戰爭以來、印度で儲けた金を以て、この方面は香港を中心に、南支は勿論南洋、シヤム及びボルネオの植民地のマカオあたりまで、金融的に、そして、交通、土地を支配してゐるのだ。彼らの葉卷の蔭の顎の動作は、その素晴らしい權益の保護と擴張の胸算用でもしてゐるのであらう。

この平和の如くにして戰時的な香港には、英系猶太財閥の使徒を以て光榮としてゐる賣國的支那財閥が澤山ゐるのだ。阿片と金と政權は、支那人を朦朧とさせて了ふらしい。

香港と云ふところは、ユダヤ的に金の事は實にはつきりしてゐるが、それを最もよく現はしてゐるのは、ビクトリアの頂上から汀へ掛けての貧富の分類のあざやかさだ。この中で杜其章のやうなユダヤ思想宣傳の新聞經營者や、顏成伸、何東、周壽臣のやうな阿片成金、武器輸入成金共は、すつかり英國人氣取りで、麓の同じ民族を輕蔑してゐるのである。

上海陷落直後のある夜のことであつた。

ビクトリア峰でも、最も見晴らしいの良いと云はれるMホテルのサロンの窓ぎわに陣取つた二人の英國紳士が、時々窓外の夜空を眺めながら、人待ち顔にしきりに語り合つてゐた。

背の高い貴公子然とした方を、サンキーと云ひ、よく肥えた美髯の紳士をエドマンと云ふ。

「ねえ、エドマン君。上海はもう少し持たえられると思つたが、蔣介石も案外なものだつた。今日上海からの情勢に依ると、もうバタバタと行つて了ふらしいぢやないか。我國は最つと積極的に援助が出来なかつたものかなあ。援助は兎も角妨害がさ。」

「それはつまり、もう無益だと思つたからなんだらう。何しろ白崇禧の軍隊でさへあすこでは逃腰だつたと云ふからな。」

「ふむ、すると南京でガツチリと打留める計畫か。だが吾々の方は大いに長期交戦を熱望するがね。あは……。」

「その長期交戦こそ我國の最とも望むところさ。日本はなか／＼油斷のならん力量を持つて居るから、我國で飽迄國民政府を助けて日本の戦闘力を消耗させなければ不可なのだ。どつち道、我國は、近き將來に於て日本を相手にして太平洋の爭覇戦を戦はなければならぬのだからな。」

「勿論だ。なればこそ、我國は南支全般及び佛領印度、シヤム、フィリツピンへ向つて必死に經濟的政治的工作をしてゐるのぢやあないか。時に、雲南方面のフランスの抗日運動は大分うまく行つてゐるらしいな。」

「そりや何と云つたつてあの人達の仕事だからな。」

彼等の所謂「あの人達」といふのは、上海及び香港のユダヤ財閥サツスーンと深い關係の

あるフランス系ユダヤ財閥の事なのである。

この時、近くのテーブルで、

「おい、やつてゐる。やつてゐる。」

と、武器輸入屋らしいアメリカ人が、誰にともなく窓外を指差しながら、痛快さうに叫んだ。人々が窓に寄つた。サンキーとエドマンは、微笑を交しながら、同じやうに窓外を眺めた。

それは、九龍の空に美しい近代的花火が上つてゐたからだ。即ち、この空には、飛行機のテール・ランプが、彗星のやうに交錯し、空中戦演習のはら／＼する冒険が散布されてゐるのだ。その巨大な螢たちを、四方の要塞地帯からサーチライトで照し、山々には／＼と高射砲聲が轟き渡つてゐるのだ。

如何にも、武器ブローカー共を、狂氣させさうな戦争臭い風景だ。

この時、一人のすつかり英國ナイツされた支那紳士がニコ／＼しながら、二人の傍に近寄つて來た。

「御待たせしました。御見學ですか。」

「やあ、周一榮君。」

サンキーが振り返つた。

「この間は種々有難う。」

と、エドマン。

「おさしつかへなければ、別室で御用談致しませう。實は主人から種々申し付かつた事がありますので……。」

「イエス、結構。」

やがて三人は、エレヴェーターに乗り、五階の一室に入つた。サンキーは、エレヴェーターに乗つた時、非常に優雅な香水の匂ひに包まれてゐるフランス人らしい若い美人の先客を一寸眺めた時、どこかで見た事のある女だなと、ふと思つた。

三人が、借切つた一室でしきりに商談をやつてゐる間に、エレヴェーターは、地階と七階との間を間斷なく往來した。お客は皆な紳士淑女の如くであつた。その中で、一番多い紳士

は、戦争に關係のある紳士であつた。殊に、佛國のシュナイデル兵器工場の出張員とか、白耳義のジョン・コケリルの代理人とか、英國のゲスト・キーン社の副社長とか、獨逸のクツブ・チセンのスパイとか、チエコのスコダ會社の買込員とか、米國のエレクトリックボート會社の社員とか等々の、武器商人が多いのである。現に今、香港第一の武器輸入屋何東ホートンの番頭周一榮と五階へ消えたのも、英國最大の武器會社ヴィツカース・アームストロング會社の社員なのである。

美の街香港は、抗日武器商人共の、ピストル型の眼玉で一杯だ。

2 天晴なる戰術家

ビクトリア峰の頂上近くにある、何東ホートンの豪華な邸には、常に、英國に追従する者、英國と結託せんとする者、支那で金儲けを企む者、抗日思想家などが押掛けて來てゐた。従つて、ユダヤ人の臭ひがぶん／＼してゐたのである。

一體香港の經濟界を牛耳つてゐるのは、凡てユダヤ財閥である。英國、上海に本據を置く

例のサツスーン財閥一族一黨の勢力も素晴らしいが、香港の株式界には株式取引所理事長のヴィ・ベンジャミン、取引員の親分フリックス・エー・ジョセフをはじめ、多くのユダヤ人がゐたし、土地交通にはサー・エリー・カドリー一家が頑張り、ホテル電話コンクリートにはイー・エム・レイモンド一族がのさばつてゐる。その他凡ゆる利權がユダヤ人に喰はれ、香港の金持紳士の重なる者といへば、エス・イー・レヴィ、モーゼス、アブラハム、グリーン、ゲツベイ、エドガー、デギット等々と、國家なき民族の名刺を並べてゐる。

この連中が、何東の親友である事は云ふまでもない。それには、クラシツクな因縁のあることで、抑も何東の父なる者が、印度で儲けた金で、支那にユダヤ帝國を建てやうとしてやつて來た英國系ユダヤ人の一人だと言はれてゐるのだ。が、母親はその金持旦那の妾をしてゐた純然たる廣東人だ。

で、彼は、英國式教育を受けて成長したので、思想は勿論顔まで英國化して了つてゐる。

彼の國籍は母方の支那にあることはあるのだが、自分でも支那人である事を忘れた位で、従つて、阿片密輸とか、支那政府の對英借款の仲介とか、軍閥戰の武器輸入とかといふ、凡て

祖國を英國に賣拂ふ仕事を専門に巨富を成してゐるのである。

而も、英國人氣取の彼は頗る附の抗日家だ。だから、今次支那事變でも、疾くから上海のサツスンと呼應して蔣介石を助けて、香港方面からの武器輸入の仕事を、一切引受けてゐるのである。

彼は、抗日の凝り固りだけに、歐米盲拜家で、仲間たちも皆な歐米の教育を受けさせ、自國の軍閥へ、間諜の如く入れてゐる。

佛國の陸軍大學を出た長男は、何と張學良の親衛長だ。英國海軍學校に學んだ次男は、蔣介石の高級參謀だ。コロンビア大學卒業の三男は、宋子文の祕書で、宋とサツスン財閥とお使ひ奴だ。娘たちが、どんなに歐米婦人にあこがれてゐるかは、日本のフラツバアが、ハリウッド・ガールにあこがれる以上に眞に迫つてゐる。

何東^{ホウトン}は、この仲間たちの利用の仕方を、實に天晴な、英旦^{バトレン}那への奉仕だと信じ、ひそかに悦に入つてゐる。

何東は、支那事變勃發以前から、蔣介石に、南支の利權や武器輸入を條件に、抗日借款の

仲介をしたり、抗日資金を融通したり、英政府との時々刻々の交渉に當つたりして、大活躍をしてゐた。何しろ、かういふ仕事は、彼でなければ巧妙に出来ないことであるし、又面白いやうに儲る仕事だつたからだ。

今朝——それは、上海が完全に日本軍に陥落されたといふ報が來た日の翌朝のことであつた。彼は南京政府軍が、中支の重要港上海で慘敗した状況についての詳報に接したところだが、別に驚いた顔も見せなかつた。むしろ、多數の武器が消耗されたであらう事と、彼が私に熱望してゐた奥南支での長期抗日戦の日が近づいたことを、悦んだ位のものである。彼は、祖國支那の悲しむべき運命のことも數億の可哀さうな民衆のことも、少しも考へず、只管に、國民政府の最後の抗日戦を通じて英國の持つ「有利な地位」のことだけを考へてゐたのだ。

既に七十三歳だが、金と正比例して勢力のありあまる身體へ、朝食をつめ込んだところへ廣東の余漢謀のところから、電話が掛つて來た。

余漢謀——今朝又日本軍飛行機に昨日修理の出來上つたばかりの飛行場と粵漢鐵路の數ヶ

所を猛爆された。大至急飛行機を廣東へ集中出来るやう御盡力願ひます。それから先日副官に御願させた軍需工業會社の充實の件も至急御手配願ひたい。

何東——心得て居る。して、白崇禧君は？

余漢謀——南京でせう。

余漢謀は、愉快さうに答へた。

何東は、電話を切つて了ふと、いつか彼を煽動して、李宗仁や白崇禧を裏切り、蔣介石勢力に轉向させた時の事を想ひ出して苦笑した。

そこへ、約束の婦人客が訪ねて來た。彼は、その婦人客が、頗る腕利きで而もエロテイクな美人である事を想ふと、年甲斐もなく昂奮をおぼえた。

秘書の案内で颯爽として、何東の特別應接室へ入つて來た婦人は、フランス人カレル嬢であつた。もう三ヶ月ほど以前からMホテルへ泊り、何東の仕事の爲めに働いてゐるのである。「さあ、お掛け。して、どうちやつたな？」

何東は、相手のしなやかな姿を舐るやうに見つめながら。然し、仕事の言葉は嚴格に言つ

た。

「では御報告致します。」

何東は、全身を耳にした。だが、好色家の憎らしいほど達者な鼻が、カレル嬢の自慢の手製香水の煙幕を衝いて、その妖艶に香る若い血の躍る肌の匂ひを樂んでゐた事は言ふまでもない。

3 しかばねを越えて

一九三七年十二月十八日夕のこと、アーサー・ハドンといふ青年のアメリカ商人が、九龍の廣九鐵路起點の近くで、何者にか暗殺された。

この邊を、漫步してゐる時、何處からともなく飛んで來たピストルの彈が彼の實利的な心臓を、永遠に止めて了つたのであつた。

時刻は、日本の東京で、南京陷落の祝賀と、抗日支那のアメリカ的遷都の將來を豫言しての、大提灯行列が、日比谷に向つた頃合である。

アーサー・ハドン青年の死體が、海から吹き上つて來る寒風にさらされてゐる頃、Gキヤバレーの前で、人待ち顔に一人のスマートな英人貴公子が佇んでゐた。サンキーであつた。

サンキーは、昨夜、廣九鐵路で、廣東へ行き、南京陷落前から急に多忙になつた漢口へ出發するエドマンを見送り、一緒に來た周一榮の招待で一時雲がくれて、やがてこゝに現はれたのであつた。

Gキヤバレーの少し手前の、洋品店の前で一臺の自動車が停ると、中から、いかにも植民地のキヤバレー出入の女らしく、あくどく化粧をほどこしたフランス人らしい婦人が飛出した。と、サンキーは、その婦人を大きな毛鞠のやうに、美事に抱き上げ愉快さうに笑つた。

Gキヤバレーの三階は、下の挑情的な音楽が、煽動するやうに響いて來て、戀など語るのは最もふさはしい。

が、こゝで、サンキーと、カレル嬢と語つてゐるのは決して戀ではない。二人共、戀のやうに情緒的ではなく、政治的にスパイ的に紅潮してゐた。

「成程ね、Mホテルのエレヴェーターで一寸御目にかゝつた時、どうして僕は貴女が思ひ出せ

なかつたんでせう。オスカー・ワイルドではないが美は凡てを征伏するといふから、その爲めかも知れませんか。」

「御冗談は御止め遊ばせ、貴男がいくらバジル・ザハロフを氣取つても駄目ですわ。」

「え、どうしてそんな變な事を仰有るんです？」

が、女は男にウキスキーを注いただけで、軽く笑つて答へなかつた。

今、二人の會話に上つたザハロフといふのは、國際軍需品製造業界のナボレオンで、ユダヤ人中でも才物中の才物で、今日隆盛な歐米の武器製造會社は皆な彼の支配下に在るのである。ザハロフは、ギリシヤ生れのユダヤ人で、その絶世の美男故に、詐欺、破獄。そして暗殺の爲めに英國に逃げ込み、ある高官に取入つて英國のスパイとなり、やがて英國大兵器工場ノルデンフェルドの注文取りとなつて、ギリシヤに歸り、かのバルカン戦争で得意の怪腕を振つたのがもとで、米、獨、佛、露、英等の武器製造會社の支配者となつた怪人物である。最近アメリカのユダヤ系の新聞は、彼の存在をカムフラージュする爲めに、『彼ザハロフは八十六歳の老齡をモンテカルロに送り敗慘の身をかこつてゐる』と報じてゐるが、そんな事は

大嘘で、つひこの間まで英國のウィツカース・アームストロング會社の社長アルバート・ウィカースのかくれた顧問として、英米の軍需品會社の聯繫に躍つてゐたのである。

さて、カレル嬢は、サンキーのよく整つた顔をちつと見つめてゐたが、

「サンキーさん、貴男はどうして同じ仲間のハドンさんを殺させたんですの？」と訊いた。

すると、サンキーは、一時意外といふやうにカレル嬢の顔を眺めたが、やがて太々しく、
「僕だつてハドン君が、僕の會社の姉妹會社の人間だ位の事は知つてゐます。だが、彼の頭は、只金を儲けるだけを知つてゐて、眞の抗日意識がないから駄目なんです。」
といつた。

「その位の事でハドンさんを闇討ちにするなんて卑怯だわ、凡そ理由がないわ。」
「ところが大有りなんだ。」

「どんな？」

「この日本軍を全滅さす可き絶好の機會に際して、彼は敢て役にも立たん武器ばかり何東氏

に賣込んでゐたんだ。僕はある機會に彼の閨歴を調べた處が、彼の父親は日本に非常に世話になつた事があるんだ。彼は意識的に吾々を裏切つたのだ。彼は、このあたりで、くたばるのが一番死花なんだ。何故つて、南京政府はたうとう遷都するし、南京は陷落するし、彼奴は屹度地下でバンザイを叫んでゐやがるよ。」

「サンキーさん、貴男は随分認識不足な方ね、妾、あきれちやつた。」

「どうして？」

「どうしてつて、あのアーサー・ハドンといふ方は表面は米國のエレクトリック會社のスベ
ーヤ副總裁の祕書で、香港出張社員だけれど、實はザハロフ閣下からの何東監視員なのよ。」
「え、それは少しも知らなかつた。」

サンキーは、頭を抱えて、自分の短慮を悔んだ。

「それよりサンキーさん、貴男もしつかり氣をつけなけりやあ駄目よ。」

「どうしてです？」

「だつて何東は實に用心深い男だから、貴男をも一應警戒してゐるのよ。」

と、カレル嬢は突然毒々しく紅く塗つた唇を開いて、大聲で笑ひこけた。

「どういふ譯です？」

サンキーは思はず緊張した。

すると、カレル嬢も、眞顔になつて、ハンドバックから何東からアームストロング會社へ宛てた武器の注文書を取り出して、意外さうな眼を見張つてゐるサンキーの前へ置いた。

「妾實は何東氏から依頼されて貴男の行動をスパイしてゐたんですが、もう、晴天白日よ。だつて貴男は、シンガポールでもう少して伊太利のスパイ娘のとりこになるところだつたんですもの。何東氏がこれをなるべく、非公式に貴男に差上げて置けとの命令でした。」

「や、有難う。」

彼はかういつて、息を呑んだ。

丁度、この頃、何東は、宋子文の秘書をつとめてゐる三男何靖立ほうせいりつと、漢口や廣東の軍備について語つてゐたのであつた。

地獄から來たユダヤ人

——抗日支那の背後に躍る彼等の正體——

1 雲南を狙つて

ピエール・ボルダと呼ばれてゐるユダヤ人は、年中佛蘭西と支那の間を、往來してゐた。商賣も時々變り、ある時は巴里の新聞通信社の東洋特派員だつたり、ある時は、鑛山會社の技師だと自稱してゐた。今度は、佛蘭西の大兵器製造會社シュナイダー會社の支那出張員の名刺と、佛系ユダヤ財閥中の世界的穀物王、ルイ・ドレフユース會社の東洋出張員と云ふ名刺を持つて支那へやつて來たのである。だが、彼が支那と佛蘭西との間を飛び廻つてゐるのは、何も彼自らの意思でやつてゐるのではなく、ルイ・フォールドといふ佛系ユダヤ人にあ

やつられてゐるのである。

二二

彼は、物心ついてから、三十年間と云ふもの、自分で自分をマスターする生活をしたことがなく、ルイ・フォールドの計畫と命令のまゝに動いて來たのであつた。

彼は、ユダヤ人の銀行員を父とし、軍人の娘を母として、巴里に生れ、工業學校を卒業したが、この中等學校を卒業してからと云ふものは、ずつと育ての恩人のルイ・フォールドのために働いて來たのであつた。が、彼は、父母については、その寫眞を見たことさへないので、ルイ・フォールドの言ふ通り「身寄も何もない孤兒で、父の知人なるフォールド氏の格別な同情で一人前の人間になれたのだ。」と信じてゐるより他はなかつたのである。

ボルダは、無妻主義で……これもフォールドの嚴命だつたが……年より若く見える、どこ

か東洋的な面差し、立派な紳士であつた。

彼は、上海事件當時からずつと上海や香港にゐたが、昨年支那事變が勃發すると、フォールドの指令に依り、雲南に入り込んで暗躍してゐた。が、南京の陥落と同時に、巴里に呼び寄せられ、重大な實務を負はされると、佛領西アフリカのバザースト、イランのペンデルア

ツバス、印度のカルカッタ、海南島等に立寄り、フォールドの手足的人物と要務を果して、佛領印度支那のハノイへ着いたのであつた。

丁度、日本軍の漢口攻略戦が、猛烈の度を加へ、總攻撃に移る直前のことであつた。

彼は、數ヶ月の旅行中に、日本軍が豫想外の戦果を納めたことに驚嘆すると共に、段々支那の宣傳に疑ひを持つやうになつてゐた。しかし、彼の仕事は、佛蘭西政府の對支政策の線に沿つた仕事だつたので、如何に支那が負けても勝つても構はないとは言へ、支那の惨敗は愉快ではなかつた。

彼は、英國の仲間の手を通じ、香港から盛んに軍需品の輸入される姿を頼母しく眺めて來たが、今度海防に着いて見ると、香港に劣らず、武器が輸入され、鐵道やトラツクで支那内地へ持込まれてゐるのであつた。

「防共協定國以外の世界中の武器は、皆な吾々の製造するところものだ。」

ボルダは、フォールドが自慢たつぷりで云つたこの言葉を思ひ出した。

河内^{ハノイ}へ入ると、H・バトラ^{バトラ}といふ英國系の仲間と、ジャン・スーブルといふフォールドの

秘書が待つてゐた。

こゝで、ボルダは、スーブルから、

「君はこれからこゝと雲南との聯絡員になること、及び暇があつたら雲南省内の新富源を研究調査することになつてゐる。」

と、申渡された。

そして、彼は、二日休息しただけで、昆明の航空訓練所へ送る飛行機材料を山のやうに積んだ汽車に乗つて、佛蘭西の建設した滇越鐵路の客となつた。

昆明へ着き、指定されたホテルに入ると、豫ねてから知り合ひのマスと云ふ仲間に會つた。

マスは、ボルダの顔を見ると、待ち兼ねたやうに、

「よくやつて來て呉れたね。僕は飛行機でやつて來るものと思つてゐた。君、最近の雲南は愉快な出來事ばかりだ。こゝはもう斷然吾々の勢力下にある。日本など幾ら頑張つたつて、もう一指だつて染められやせん。やがて此處へ、支那の首都が移されるだらう。さうなれば

佛蘭西とイギリスは、完全に支那を支配したと同じだ。經濟も政治も文化も凡て吾々のものさ。」

と、鍵ツ鼻を高々として云つた。

2 戦争を製造する者

ボルダを、ロボットの如く使つてゐる、ルイ・フォールドと云ふ人物は佛系ユダヤ財閥の巨頭ロスチャイルドの番頭だつた者で、今日では財、政、兩方面に勢力を有し、佛蘭西の内閣製造の策謀家であると共に、ユダヤ人を以て固められる國際聯盟の役員を務めてゐる大金持である。オリンピッククを、日本に開催することに就いては、今事變が勃發する前から、歐米ではいろいろ反對されて來たが、最も反對したのは、滿洲事變後滿洲に投資しようとして果さなかつた、英米佛のユダヤ人であつた。英米佛の、オリンピックク委員中には、可成りのユダヤ系の者がゐると云はれて居、その中には日本開催に好意を寄せる爲、奇怪にも「心臟病」に罹つて死んだ者もあると云はれてゐる。フォールドの魔手は、云ふまでもなくこのス

スポーツ方面にも延びてゐた。

何となれば、國家なきユダヤ人が、世界をユダヤ帝國とする大陰謀の一つに、三S主義といふものがあるが、それはセツキス (Sex)、スポーツ (Sports)、スクリーン (Screen) であるが、性^{セツキス}方面では、戀愛の自由や、貞操觀念の墮落、道德の破壊を示唆し、運動競技方面では、眞の國民的スポーツ精神を没却せしめ、單に華麗にして骨抜き遊戲に走らしめ、映畫では、セツキス方面のユダヤ調を高揚すると共に、ある民族の繁榮を阻止する産兒制限、優秀民族の頽廢を目差して、たくみに、國家への誠忠と、民族の發展を忘れしめるのである。ある國に、ジャズの音楽入りの映畫が流行した爲離婚が増加し、産兒統計が非常に減少したといはれてゐる。フォールドは、この世界の帝王達を絶滅し、民族を文化的アヘンで殺す運動にも、主役をつとめてゐるのである。

彼こそ、本當の地獄から來たユダヤ人だ。

このフォールドは、上海の例の英系サツストーン財閥と聯絡を取り、蔣介石を自己藥籠中のものとして、支那をユダヤ化する爲めに、敢て抗日戰爭を惹起せしめ、矢張りユダヤ主義の

一つである共産主義ソ聯と握手させて——ユダヤは、常に最極端なものを武器としてゐる。資本主義と共産主義がそれで、民族が争へば争ふほどユダヤ人は悦ぶのだ。世界大戦もユダヤ人が惹起したのだし、ロシア革命もユダヤの魔手である。だから、戦争が起きれば、彼らは儲かるし、兩民族がへとへとに疲れることであるから、ユダヤはそのどちらにも金を貸すといふ譯で——抗日思想をあほつたのである。

彼らは疾くから邊境の富源雲南に、野望の眼をむけ、こゝをユダヤ化する爲めに、阿片戦争以來、利權獲得に暗躍しつづけて來たのである。

それは、支那に大量的に利權を持つところの、英系ユダヤ財閥と協定してやつて來たことであるが、たとへ國籍を何處へ置いても、それは一種のカムフラージュであつて、ユダヤ人である事には變りはないのである。

彼らは、毒牙を匿した上品さうな言葉で、雲南のことを、「アジャの翡翠の城」と呼んだ。或は「水晶の山」とも呼んだ。陰謀紳士の形容詞はまことに美しいが、その泥色の腹の底では、あの豊富な鑛山の寶庫に舌なめずりしてゐたのである。

そこで、着々と雲南攻略に取り掛り、佛領印度支那と雲南との間に、鐵道を敷き、公路をつくり、航空路を開いた。これは、ビルマから、魔手を伸ばした、英國の仲間と相呼應したものである。

フォールドは、世界のあらゆる國でやつて來たやうに、この省内に住んでゐる漢民族、滿洲人、蒙古人、回々教徒、西藏人、苗族の間、就中漢民族と回々教徒の間に争ひを惹起させそれを種に、進入の機會を作つて來た。

雲南省は、日本の留學生だつた親日家の唐繼克が、雲南モンロー主義を唱へてゐた時代は頗る親日的で、日本の商品の良い御得意先きであつたが、滿洲事變が勃發すると、佛英は待つてゐたと云ふやうにチャンスをつかみ、抗日を煽動し、つひに日本商店の襲撃事件を惹起させ、日本人を全部引上げさせて了つた。

その後は、益々抗日の街、暴徒の街と化し、日本人は一人も入ることが出来ないやうになり、日本の商品は、凡て佛蘭西商品と替へられて了つたのである。そして、ユダヤ人たちは英佛の軍隊に守られて、思ふまゝに寶庫を切り開いてゐるのである。

かうして、日本人は、俄かに抗日的となつた雲南から。

「東洋鬼、明天來!!」

と、惡罵されてゐるのである。

雲南省の首都の昆明の人口は、十五六萬だが、ユダヤ的な國々の、蔣介石への援助の爲め益々増加しつゝある。彼らは、英國の勢力下のビルマに近く、佛國の勢力下の佛領印度支那に隣接した昆明を、蔣政權の首都として、蔣らを意のまゝに踊らせ、ソ聯と協力して、日本の進出を阻むと共に、東洋平和を攪亂しようとしてゐるのである。

昆明には、外國人が五六百人ゐるが、フランス人が一番多く、ことに輸出入商が大勢力を持つてゐる。支那事變以來は、武器の輸入ルートなので、この關係の英佛人が、巨大な蝗群のやうにやつて來てゐる。そして、大量の抗日武器を持込んで、惡魔でも計り兼ねる程の凡ゆる饒富を持出してゐる。

ボルダも、その一人だ。

だが、ボルダは、世界をユダヤ王國としようとするユダヤ民族の陰謀の中では、釘一本の

役割しかしてゐないのだ。世界中に分散して、一つ一つの役目を果してゐる、無數のユダヤ人たちのやうにボルダたちの手足についてゐる、糸をぐつと握りしめ、脚本を書き、舞臺監督をなし、督勵してゐるのは、ユダヤ・クラブやフリーメーソンや國際聯盟やを指導してゐるフオールドラである。このユダヤの使徒らは、巨豪な財力と自由主義と、共產主義とユダヤ文化とを武器として、他民族の滅亡を策謀してゐるのである。

彼らは、他民族の戦争で金を儲け、その金力を以て他民族をユダヤ化し、一步步、目的の達成に近づかうとしてゐるのだ。曾つて、日本とロシアと戦はせたのも、世界大戦を惹起したのも、ロシアを革命させたのも支那事變をこしらへ上げたのも、そしてやがて、歐洲を他民族の血で染めるのも、彼らである。

ルイ・フオールドラが、巴里の事務所で、國際聯盟の委員の仲間と電話で打合はせをしてゐるところへ、ドイツとチェコへ潜入させて置いた諜報機關から秘密電報が届いた。

「とに角、問題は戦はせる時期だな。」

彼は、つぶやいた。そこへ、河内にやつてある秘書のジャン・スーブルから、

「廣州灣は着々と武裝化されてゐる。雲南に要らぬ蟲あり。」

といふ暗號電報が着いた。

彼等秘密結社の中ではある種の虫は、あたへられた一定の仕事が終ると、無用なものとして、殺されるのである。フォールドは、支那系の者を呼びつけた。

3 不思議な存在

ボルダは、毎日早朝から忙がしさに飛び廻つてゐた。

佛蘭西政府の息のかゝつた省の要人達を訪ね、要談を遂げると、次は、城内の火藥局や軍需品の發送所や、講武堂などを訪問して廻つた。それが一段落つくと、鑛山關係の調査に取り掛つた。

彼が密令を受けたのは、アーノルドの廣東アンチモニー工場よりずっと大きなアンチモニー工場を建設することであつた。

既に、金洲江の金鑛や、箇舊の錫や、湯丹の銅には、英佛のユダヤ人が手をつけてゐる。

而も鐵、亞鉛、石炭、硫黃、銀、アンチモニー、大理石、琥珀、水晶、翡翠等の發掘の爲め香港からユダヤ財閥の手代が續々と入り込んで來てゐる。

支那は、まるで、貪婪飽く事を知らない猛獸の前の、巨大な美肉の如くだ。蔣介石の奥地逃込みと共に、雲南は、ユダヤの野望と、よだれで穢されつゝある。

ボルダは、アンチモニー事業について、成功の見透しをつけると、ジャン・スーブルに詳細に報告した。

ある日、ボルダが、幾らか軽い氣分になつて、この年中美しい花の咲いてゐる常夏の樂土の高原の街を散歩してゐると、輪廓のはつきりした國際的な血を持つた美人をつれたマストに出會つた。

マストは、この數日、何處かへ姿を消してゐたのであつた。

「寸暇を利用して一寸小旅行をして來たよ。これがその御土産さ。」

マストは、責任を持たされた仕事全部終つたことを、言外に含めて云つた。

「そりや結構だ。實際いゝお土産だ。」

「僕は近く香港へ行く。活躍舞臺が變つたんだ。」

「僕はこれからだ。」

この時ボルダの顔をちつと見つめてゐた女が、驚ろいたやうな聲で、

「貴男は神様に選ばれた民族のお顔ぢやなく、まるでトルコ人だわね。」

と云つた。

ボルダは、舌が釣るほど屹驚して、稀らしさうに彼を見上げてゐる女の顔に眼を瞠つたが、
痺撃するやうに苦笑した。

「失禮な事を云ふもんぢやない。ボルダ君許してやつて呉れ、この婦人は單に可愛い、小馬
に過ぎないんだから。」

「否や、別に腹を立てる理由はないさ。」

ボルダは、マストに別れると、急いでホテルに歸つた。そして、身體中が痛むやうな、重
苦しい氣分で、椅子に身體を投げた。何か、大きな運命的なものに打突かつたやうな、ずつ
と以前から、眼には見えないが、心の底に芽生えてゐたものが、あの女の聲で俄に成長した

やうな氣がした。怖ろしいまでに息苦しい。

そして、彼は、東洋へ繁々と往來するやうになつてから自分の祖先の血に疑ひを持つやうになつて來た。恩人のフォールドは、彼にユダヤの子といふ證明を與へてゐる。だが、彼はその言葉に疑ひをだきはじめてゐた。

東洋へやつて來て、回々教徒の國へ入ると自分に似た顔が澤山ゐる。彼は、宗教の敵に似てゐたのだ。それが最初の戰慄であつた。又、彼は、東洋を離れてゐると、故郷が戀しく思はれるのであつた。この不思議な心は、彼の秘密中の秘密であつた。彼は、ずつと前、新疆省を旅行した時、自分によく似た容貌の男から仲間のやうに呼びかけられたことがあつた。その時彼は、思はず返事をし掛けてやめた。彼は、時々その心理を深く掘り下げて沈思にふけることがあつた。今日は、その日々の悩みを、單純でいろいろな血の流れを持つた女から直覺的な表現で、觀破されたのであつた。

「俺はきつとユダヤ人ではないのだ。」

彼は、その結論を悦んでいゝのか、悲しんでいゝのか判らなかつた。神の選民ではない。

これは、習慣的な悲しみであつた。俺には東洋人の血が流れてゐる。これは新らたな驚異であり、悲しみであつた。だが、不思議にもかう思ふ方が、精神がからつとするやうな明るい気分であつた。

彼は、自分を、世にも不思議な存在として眺めたのであつた。どこの民族だか分らないといふ事ほど、人間として大きな淋しさが又とあらうか。フオールドに言はすれば「ユダヤ人」だ。先刻の女の直感、自分でも秘かにおそれてゐたやうに「トルコ人」だ。彼は、自分の身が二つに割れたやうに悲しかつた。

ボルダに憂鬱の日々が続いた。仕事が手につかないやうな日が多かつた。

4 血は叫ぶ

ボルダの仕事は突如變更された。

今度の新しい仕事は、河内や香港や漢口から廻された十名の仲間と共に、從來の支那の航空網を確保すると共に、新航空路を開設すると云ふ仕事であつた。この仕事は何故か彼に

感激を與へなかつた。たゞ生命の危険を感じるのみであつた。彼は、きつといつかのあの問題の悩みで、神經衰弱に罹つたのだらうと思つた。しかし、かのユダヤの豫言書に記してあるいつかは必ず實現すべきユダヤ世界帝國の建設の爲めに、犠牲的に働いてゐる自分に、生命の危険など感ずる筈がないと思つた。

だが、彼の生命と精神は彼自身に對して、だんだん批判的となり、彼の中にゐながら、彼の自由にならない部分が出來て來た。それはユダヤ人に對して、疑ふべからざる事を疑ふ形で、具體的になつて來た。彼は、自分を持て餘し出した。

ことに依ると、彼は、トルコ人で、無理にユダヤ人にされて了ひ、ユダヤ人の繁榮の爲めに使はれてゐるのかも知れないのだ。

ボルダは、マストのさう深い親友ではなかつたが、この頃は、時々彼の身の上を思つた。といふのは、仲間のうちで、最も秘密を要する仕事を完成した者は、よく行衛不明になることがあるからだ。

マストは、最近再び通じはじめた航空路によつて香港へ行く積りだつたが、何故か鐵路と

船で行くやうに命ぜられた。が、香港へ着いたのは、彼の新らしいおしやべりな愛人ばかりであつた。

だから、ボルダが想ひ出した頃には、マストといふ人間は既に地上の何處にもゐなかつたのである。

ボルダは、一種の病氣と化した。かの重い鬱悶の中で、ぼんやりしてゐた。

かうしたうちにも、昆明とハノイとの交通は益々はげしくなり、日本軍の壓倒的な進撃に依つて、破損された支那の兵器補充のため、諸武器が後から／＼と輸入されて來た。

而も、隨所の戦場で戦略上の後退をやるゝと云ふので、國民政府の要人が、續々こゝへ集つて來た。この要人たちは、まるで戦争避難民を連れて歩いてゝもゐるやうに、どこからともなくあはれな避難民が入り込んで來ては、軍隊にこき使はれてゐた。

フオールドは、一寸英國へ行つて歸つて來ると、愈々多忙になつた。第一次世界大戰以來の忙がしきだ。

彼のオフィスの電話や無電は、ベルが鳴りつゞけ、訪問客に満ちてゐた。

彼らは、次の世界大戦を、どういふ形で起すべきかを、いろいろな會合で討議してゐた。又支那に徹底的に富源を確保する爲めには、蔣介石をもつと悲痛に踊らさねばならない。その方法といふのが、彼らの眞剣な議題だつた。

この大陰謀の畫策の多忙の中で、ルイ・フォールドが、ユダヤ人に仕上げて利用した一トルコ人のことなど思ひ出す筈がない。

ボルダは、ハノイから俄に呼びつけられると、怖ろしい豫感に戰いた。だが、鐵則が頭の芯まで浸み込んでゐるので、鎖で手繰り寄せられるやうに、出發した。

けれ共、彼は遂に、ユダヤの秘密と、自分の民族的苦悶を胸に秘めたまゝ、生れてはじめて自分の力で自分を處理し、ハノイで待つてゐるであらう「東洋に好意を持つ裏切者」の運命に従つた。

そこに、まるで夜の如く地球を蔽はんとするユダヤ人の大陰謀の前に、東洋人の一つの生命が、またも塵埃のやうに犠牲にされて行つたのである。

戦争の製造家

1

私は、ハルビンで、はじめてユダヤの陰謀の問題を知つたのでした。

それは一九三六年の夏のことでした。

私に、この問題を、現代に於て最も切實な重大問題だとして説いて呉れたのは、インド人の商人でした。この印度商人は、商賣の方は餘り上手でないやうでしたが、ユダヤ財閥の問題については、一權威のやうでした。

彼は、ウルタニと呼ばれてゐましたが、かの「東方に打返す波」を著はしたり、ユダヤ人

の怖るべき豫言書「プロトコール」を譯したフリー女史の著書をよく讀んでゐました。

ウルタニ氏は、英國はユダヤそのものである、と言ひ、フランスはユダヤ人の心臓で生きてゐるのだと毒吐き、米國に至つては、ユダヤ人のエルサレムだと云つてゐました。

彼は、非常なドイツの同情者で、ドイツはユダヤ人の陰謀に依つて、あんな非道い目に遭つたのだ、だから、早晚ドイツは積極的にユダヤ人を追拂ふだらうと、頗付の深い自信を以ていつてゐました。

そして、その時、ドイツを追拂はれたユダヤ人を引取る國こそ、甚だ見物であつて、即ち問はず語りに、ユダヤ國である事を證明するのだ、實に見ものだ、といつてゐました。その時、ウルタニ氏は、懷中から、氏の生命より二番目だといふ、小さなポケット手帖を取出して、悲憤に堪えないやうにそれを見つめながら、

「ユダヤ人の中にも、それは善良な人間もゐるでせう。ですから、ユダヤ人だからといつて私たちは何でも彼でも敵だと思つたり排撃したりしていいものではありませんが、然し、全體的に見てユダヤ教の信者は、偏狹で、慘虐で、エゴイストです。彼らは、世界中を戦争と

赤化のルツボと化し、その間に於て、あの無限な財力と政治力と陰謀的團結とを以て、世界中から帝制を無くし、自由主義の美名に於けるユダヤ的革命の中に陥入れ、そのユダヤ大帝國建設の目的を達成しようとしてゐるのです。」

と、腹立たしさうに云ひました。

そして、私が頷いて見せるのを見ると、我意を得たりといふやうな様子をして、次のやうな恐るべき事實を物語りました。

「我々の祖國を、東インド會社の侵略的陰謀にさらしたのは、勿論英國のユダヤ人共ですが、かの阿片戰爭を無理に惹起して、支那を経済的政治的に征服したのも、ユダヤ人です。この時は、英佛系のユダヤ財閥の協力でやつたことだと思ひます。つまり我が祖國への投資の儲けで、支那に最も大きな野心を充たさうとした譯けです。英佛米が、その野心國に對する常套手段は、先づいき成り戰爭の切掛けを作つて、その戰爭に勝つて俄かにのさばり出すか、或は、所謂平和的手段でもつて、クリスチャンを潜入させ、教會を作つて人道主義を宣傳して民衆をとりこにして行くか、ある程度の社會主義を教へて、相手の國內の階級的混亂を計

るかであるが、その執れにせよ、教會新聞を發行するといふのが手で、この新聞ははじめのうちは殆ど宗教的なものであるが、漸次經濟的色彩を加味し、自然のうちに民衆に重寶らしい「經濟新聞」を發行し出すのです。これにやゝ成功し出した頃、商人が澤山の資本を持つて入込んで來るのです。そしてこの商人が、いつの間にもやゝ、經濟社會政治を大量に取扱つた近代的新聞を發行するのです。この新聞を宣傳機關とし武器として、この商人は、支那の政治にまで關與する程の力を持つ勢力と成るのです。もうこの頃には、支那なら支那といふ相手の國は、もうすつかりユダヤ財閥の金しぼりに遭ひ、經濟のみならず政治的にも支配されるやうになるのです。我が祖國を喰ひつくしたユダヤ財閥が、目の色を變へて狙つてゐるのは、何といつてもアジアの大富源支那です。が、彼らの野望達成に、非常に邪魔になるのは、言ふ迄もなく日本です。貴君の御國です。支那の南方軍閥は、孫文のやうな親日家と云はれた人でさへ、ユダヤの外廓運動のフリーメーゾンの會員だつたといはれてゐるのですから、元來がソ聯で立身の道を見つけて來た蔣介石が、容易に彼らの傀儡になるであらうことは想像に餘りあります。それに、現在の蔣介石のバトロンの浙江財閥でも香港財閥でも南洋

の華僑でも、凡てユダヤの息がかゝらないものはないのです。」

「その御話はよく理解出來ます。宋子文、顧維鈞といふ顔ぶれを見たゞけでも合點が行きます。」

「あの、そら、日露戦争も、本當はユダヤの畫策でした。第一次世界大戰の前提としてね。」
「それは驚いた。尤も、あの時高橋是清氏に敢て戦費を貸したのはユダヤ人だと聞いてゐたが……。」

ウルタニ氏は、

「勿論……。」

と云つて、言葉を繼いだのですが、その時は、丁度、氏の事務所のあるキイタイスカヤの裏通りに火事があつたので、惜しいところで話は切れて了つたのでした。

2

それから、二日ほどすると、ウルタニ氏から、私の宿へ電話が掛つて來ました。ウルタニ

氏は、例の話のつゞきをしたくて堪らない様子なのです。その日、私は、飲過ぎから来る胃病で弱つてゐたのでしたが、勇氣を鼓して、否やそれほどのもありませんが、いつもの喫茶店へ出かけました。ハルビンでも、まあ極寒といつていゝやうな寒い日のことでした。

ウルタニ氏は、餘程私と會ひたかつたと見え、私の顔を見ると同時に、

「日露戦争は……。」

と語り出したのでした。

「日露戦争は、凡てユダヤ財閥の陰謀です。日英同盟が既にその前提なんです。早くから極東進出に眼をつけた英佛米のユダヤ財閥は、當時支那滿洲に野心を持つ帝制ロシアを討たざるを得なかつたのです。と同時に、どうやら不思議な力を持つ日本も、出しや張らせなかつたのです。そこで、日本の力量で、ロシアを叩きのめすといふ名案を立て、日本には十億といふ大金を貸し、ロシアにはお手のもの内亂を惹起させたのです。この本當の腹は日本のユダヤ化にあつたと言はれますが、それは日本の國狀と偶然な機會が、それを阻みました。尤も、當時米國のユダヤ財閥は、日本人の警戒強さに驚ろいたと書いてゐますがね。

そんな事より私がお話しようとした重點は、あの日露戦争の折、日本に金を貸したのも、ロシアの第一次革命に投資したのも、同じく英國のユダヤ資本王ロスチャイルドの番頭で、後に米國のユダヤ財閥となつたフランク・フルト出身のユダヤ人のジェコブ・シツフです。このシツフは、クーンとロエブといふドイツ系ユダヤ人とヴォルフといふロシア系ユダヤ人の初めたクーン・ロエブ會社に入り、米國の銀行のトラストに成功し、ニューヨークをジュエリークと化した男で、世界の國際的ジュー金權の確立と世界の無政府狀態の招來に狂奔して來た人物です。このシツフこそは、ヒルシ男といふ同族の億萬長者から出資させ、米國に「猶太植民協會」を作ると共に、ユダヤ資本の世界の超國家的支配を意圖したのです。このヒルシ男といふユダヤ人は、フランスをユダヤ化する爲め巨額の金を投じた人物で、「世界ユダヤ同盟」の永久的資金を寄附した男です。日露戦争に關して此の「世界ユダヤ同盟」の活躍、否や暗躍は物凄く、時のロシア政府の藏相ウキツテの極東攻略を助けて敢て日本と衝突させたのも彼らだし、その裏で日本に戦費を貸したのも彼らです。つまり英米のユダヤ財閥は、自分の勢力範圍のユダヤ系政治家を踊らせて、日本とロシアと衝突させたのです。これはまあ

ロシアを助けたフランス・ユダヤ財閥と、日本を援助した英米ユダヤ財閥とが、うまく後ろで聯絡を取つて、日本とロシアを喰ひ物にしたのです。尤も、ロシアに對しては、アレクサンドル三世以來のユダヤ人壓迫に對する深い恨みがあつたのですがね。然し、かういふユダヤ的陰謀があつたので、日本は戰勝しても、佛英に壓へられた形で、強いことが言へなかつたと同時に、ロシアは慘敗してもフランスを頼つた形で有利な立場に立つことが出來たのです。それが、世界大戰と來ると、ユダヤの陰謀は愈々深刻です。」

「さうらしいですね。我國にも、若宮卯之助先生といふユダヤ研究家がゐて、そんな風なことを發表して、ユダヤ禍について盛んに警告を發してゐました。」

「御國が滿洲事變の時、ユダヤ財閥を入れなかつたことは非常にいい事だつたと思ひます。お蔭で大さう恨まれてゐますが。」

「世界大戰がいろいろなことを日本に教へて呉れましたからね。」

「決しておどかさず譯けではありませんが、ユダヤ財閥殊に支那に大野心を持つてゐる英米佛のユダヤ財閥は、きつと御國に何らかの仇をしますよ。私は、それがつまり日支間の戦争と

なつて現はれるのではないかと懸念してゐます。」

「恐らくさうでせう。支那の政界財界は、すっかりユダヤ的ですから。」

「だが、私はかうも考へてゐます。アジアからユダヤ的一切のものを追出すのは、日本ではないかとね。ユダヤ人は、一面に赤化思想を撒布し、一面にあの巨大な資本力で、經濟を攪亂し、政治的權力まで握つて了ふんですから、全くおそろしいです。でも、あるユダヤの雜誌に、日本にはユダヤ人は大して入つてはゐないが、ユダヤ思想はうんと入つてゐる、とえらさうに書いてゐましたよ。」

「或はそれは本當かも知れません。だが、日本がこれからどこかと戰爭するやうなことがあれば、それは即ちユダヤと戰爭する時ですから、普段はいろいろな思想が入つて來て表面混沌としてゐるやうに見えても、一朝事ある時は直ちに舉國一致で外敵に當るのが日本人の心の底に流れてゐる愛國精神ですから、敵がユダヤだといふ事が分れば、有無を云はせず、いつと戰ふ事は明らかです。」

「私もその御言葉が嘘だとは思ひません、まつたく立派な國民です。」

ウルタニ氏の話は、世界大戦から、いつの間にやら日本讚美に變り、果てしもなかつた。

3

その後、ウルタニ氏に會ふと、

「時に世界大戦ですがね。」

と來たので、氏の熱心さは私を吃驚させた。

「あの第一次世界大戦の本當の歴史は未だに發表されてゐませんが、その重なる理由は、世界大戦が複雑擴汎だつたと云ふ以上に、ユダヤの陰謀だつたからです。要するにユダヤの陰謀を中心に動いてゐる國際秘密力だつたからです。私の考へでは、あれは恐らく英國のロイドジョーヂと米國のウエルソンを巧妙に活躍させたユダヤ人の大芝居だつたと思ふのです。これは例の平和會議の様子から逆に見ての話ですが、あの平和會議なるものは、ユダヤ人の獨り舞臺ですからね。今、國際聯盟がユダヤ人の巢である事は、そもそもあの時から始つたのです。あの平和會議のユダヤの大陰謀については、エドワード・ジョー・デイルン氏が「平和會

「裏面史」の中で、可成り精密にバクロしてゐますが、未だ未だあんな生やさしいものではないと思ひます。世界大戦で、一番ひどい目に會つたのは、ドイツとロシアですが、それに付けてもユダヤのやり口は實に悪賢いです。何しろあの大戦の起きる前のロシアやドイツは、ユダヤ人の陰謀の温床でしたからね。」

「さぞ、すごかつたでせう。」

「凄いの何のつて。」

ウルタニ氏は、かう力をこめて言ふと、例の秘藏の手帳を、おもむろに取出し、どうすといふやうに私の鼻先きへつき出した。

その第一頁には、

「アジアのユダヤ人」

といふ題で、

印 度

二四五〇〇

パレスチナ

四〇〇〇〇〇

ロシア領	二八〇〇〇〇
支那	二五〇〇
日本	六〇〇〇
イラク	八五〇〇〇
トルコ	三八〇〇〇
滿洲國	二五〇〇〇
シリヤ	二五〇〇〇
イエーメン	三〇〇〇〇
アフガン	一二〇〇〇
その他	一〇〇〇

といふやうに書いてあつた。

そして、米國は、合衆五〇〇〇〇〇〇〇、カナダ二〇〇〇〇〇〇、その他締て六五三〇八〇〇と書いてあり、英國の條には、四〇〇〇〇〇となつて居、ロシアは二八九〇〇〇〇、佛蘭西

は二五〇〇〇〇、ドイツ四〇〇〇〇となつてゐた。

私を、成程とうなづかせたのは、洪牙利の四五〇〇〇、波蘭の三二八〇〇〇〇、オランダの一一五〇〇〇などの數であつた。

この數字が、果して正確であるかどうかは、私には分らないが、さう出鱈目ではないやうであつた。

次を見ると、

「ユダヤ人は、世界の金融資本と工業資本を握り、凡ゆる機會に國家を持つ者の間に戦争と革命を惹起せしめ、ユダヤ人の解放とユダヤ帝國建設の機會を狙つてゐる。」

と書いた條りに、

「ロスチャイルドとラサールとマルクスは、一つ穴のむじな也」

と書き、

「十九世紀末以來ドイツのカイザーに喰ついたユダヤ人は、エミル・ラテナウ、ウオルタ・ラテナウ、バリン、ヤーメス、フルト、シュヴバツハ、グットマン、シモン、フルシンスキ

イその他」

一と書いてあつた。

「ユダヤ人は、カイザーを煽動し、資金を貸して世界大戦を惹起したのだが、永い間憎んでゐたロシアへ、レーニンを潜入させあの赤色革命を起したのも、ユダヤの陰謀です。ロシアに内亂を起させ、戦局を有利に導く爲めにユダヤ人レーニンを潛行させたのはカイザーだが然しその裏の脚本家はユダヤ人だつたのです。世界大戦で一番儲けたのは、アメリカ系のユダヤ財閥でしたが、その儲けを聯合國側へ投資して又儲けると共に、英佛獨露を完全にユダヤ化して了つたんです。ドイツに革命を起したのもユダヤ人ですし、フランスを赤化したのも勿論ユダヤ人です。あの平和會議なるものが、頗る曲物で、英國のロイドジョージとアメリカのウィルソンが、すっかりユダヤの踊つ子になつて了つたから、あんな風に凡てユダヤ財閥に好都合のやうに解決されたのです。」

「アメリカはたしかにユダヤ王國ですね。フリーメイソンそのものなんだから。あの排日の盛んなカルホルニヤなど、すっかりユダヤだといふぢやありませんか。」

「あそこで反猶的なことを云つた日には、必ず暗殺されて了ひます。私は、あの反猶家のフ
ォードが、ユダヤ財閥からつけ狙はれてゐた事や、あのユダヤの暗殺團に殺されたフランス
のコテイがどんな風につけ狙はれてゐたかといふ事をよく識つてゐます。しかし、何といつ
ても、ユダヤ人の大勝利は、ロシヤ革命に成功したことです。現在のロシヤは、凡てユダヤ
人が最高の地位に頑張つてゐます。例の肅清運動つて奴も、その實は積極的なユダヤ化運動
ぢやあないですか。が、それにつけても、ユダヤ人は革命や戦争を拵らへ上げるのは上手で
すよ。まあ、ロシヤ革命をはじめ洪牙利の共產革命もドイツ革命も皆な彼らの手でやつたこ
とです。ドイツにしたところで、リープクネヒトにしろ、ローザ、ルクセンブルグにしろ、
クルト、アイスナーにしろ、革命の立役者は凡てユダヤ人ぢやあないですか。彼らが、今一
番目をつけてゐるのは日本と支那ですが、日本にはとても齒が立たんと見たので、支那へ
積極的に働きかけてゐるのです。それはいろいろな形でやつてゐるのですが、経済的には英
佛米から、政治的思想的にはロシヤからといふ手でせうね。あの世界中にユダヤ網を張り廻
してゐる米國のブナイ・ブリットや英國のユダヤ人代議士會やユダヤ植民協會やフランスの

世界ユダヤ同盟やボアレ・シオンなどは、毎日上海や香港やハノイのユダヤ・クラブへ密令を發してゐることでせう。」

ウルタニ氏はかういつて、意味深い微笑をたゝへた。

私は、その後、上海や香港に五六ヶ月づゝ滞在して日本へ歸つた。

勿論、はつきりとは言ひ切れもしないし、彼らの秘密の全貌がさうたやすく見透される筈のものでもないが、ウルタニ氏のいつたことの嘘でない事だけは確かであつた。

私は、今次支那事變が勃發すると同時に、ウルタニ氏へ手紙を出したが、どういふ譯けか未だに返事に接しない。

私には、變にウルタニ氏の生命が、氣がかりになり出したのである。

評論篇

(第二部)

11

11

11

(56-11-23)

支那に喰付いたユダヤ財閥

現在のユダヤ民族は、凡ゆる人種の集合體であるが、その基本系統は、よりアジア的であると云はれてゐる。

ユダヤ人は、パレスチナを追はれて以來、世界中に分散流浪し、丁度鰻が水のある所ならば何處にでも居るやうに、凡そ人間の住む所ならば、何處にでも住んでゐる。

而も、彼らは世界のどの國家からも、排撃されてゐるのである。只、地球上の國家で、ユダヤ人排斥の歴史を持たないのは、日本だけである。

その理由は、ユダヤ人を歓迎したり、ユダヤ人に利用されたりしたことがないからだ。

今、日本と支那には、略二萬五千人のユダヤ人がゐるが、これらのユダヤ人と日本とは、

何の關係もない筈なのである。

ところが滿洲事變以來、アジアのユダヤ財閥は、日本に反感を持ち出した。それは、彼らが早くから食指を延ばしてゐた「支那の富源」を日本に傷つけられると思つたからである。而も尙、日本は、滿洲國に對する彼らの好意即ち投資を、あつさりと拒絶して了つたので、彼らの反日は益々高まつたのであつた。

このユダヤ財閥の反日は、國際聯盟に於て如實に爆發した。何となれば、國際聯盟の主役の多くは、ユダヤ人だつたからである。

かのリットン調査團の、日本を誣ひたリットン報告書を作製したのは、調査團の祕書長で佛系ユダヤ人のハースだと云はれ、上海事變當時盛んに日本の惡口を海外に宣傳したラハマ博士も、ユダヤ人である。

その後、日本の大陸政策に對するユダヤ財閥の反感は愈々本格的となり、南京政府の心臓へ深く喰ひ込んでゐる英政府と協力して、蔣介石及宋子文を救援し、排日抗日に油をそゝいで來たが、日本が反ユダヤ人の獨逸と防共協定を結ぶや、御得意の財力と宣傳網とユダヤ人

聯盟の凡てを總動員して、反日に乗り出して來た。かくて、見えざるユダヤ帝國はインタナショナルと、世界平和論と、經濟力と、外交術の巧妙さを武器として、反日戦線に立上つたのである。

そこへ、今次の支那事變の勃發である。

支那に、權益と野心を持つ事の多い、極東在住の歐米ユダヤ人は、凡ゆる形で、反日を強化擴大した。

その最もな現れは、英系ユダヤ財閥をバトロンとする南京政府の抗日逆宣傳と、ユダヤ系役員に牛耳られる、國際聯盟の反動的動きとである。

何しろ、英米佛露の主な人物中には、必ずユダヤ人が居、就中英國は、經濟的にユダヤ化されてゐる現状である上に、歐米の重な通信社、新聞社、映畫製作所等は、全部ユダヤ財閥のものだから、反日が徹底するのは當然であらう。

私達は、今次の支那事變に於て、ユダヤ人問題を、新らたに認識する必要を、痛切に感じなければならなくなつた。

ユダヤ財閥は、世界大戰に於て聯合國に投資し、巨利を獲得し、つひには政治力さへも掌中に納め、世界平和會議をユダヤ的にリードしたが、ロシア革命にも大活躍をしたといはれてゐる。

ユダヤ財閥の暗躍を極東に限つて見ると、一六〇〇年以來、印度に進出し、一八三三年に及び完全に經濟的、政治的に印度を征伏した英國が、産業の急速な發展に依る市場の擴大を先づ支那に求めようとして起した阿片戰爭から、その活動は開始されてゐる。

一八四二年八月に、阿片戰爭勝利の結果である南京條約が結ばれたのを機會として、英國系ユダヤ財閥の資本は、どつと支那へ流入した。その後、事業投資、政治借款、鐵道借款、金融等、英系ユダヤ財閥は、ぐんぐん所期の目的に突進した。

その事實は、支那の勞働階級の、反英帝國運動、反英ストライキの歴史が、皮肉な數字を擧げて證明してゐる。

英系ユダヤ財閥は、印度の儲けを、大量的に支那に投資し、支那の金持も、華僑ブルジョアも、革命家も、南京政府も、皆な自己樂籠中のものとして了つた。その爲めになされた八

十億の投資は、サツスン財閥としては實に易々たるものである。

その間に、孫逸仙は、ユダヤ人を中心とするフリーメーゾンの英雄となり、蔣介石は南京政府を背負つて彼らの傀儡となり、浙江財閥の宋子文は彼らのロボットと化されて了つた。

ユダヤ財閥を背景とする英國政府は、日本の支那に對する發展を壓迫する爲めと、支那の完全なる歐米化の爲めに、支那に對して持つてゐたある程度の租借地を捨てたり、政治的に政府を後援したりして、協調政策に出ると共に、頗る困難な幣制改革に乘出したり、抗日作戰に積極的に參加指導したりした。

殊に、幣制改革には、英國の財政顧問で、波蘭ユダヤ人なるリース・ロス博士が、支那第一のユダヤ財閥の巨頭サツスンと相談して、自分たちの利益の爲めに決行した、政治的には、對日抗戰の費用を作らせようとしたのだ。

その金額は、一千萬磅であるが、この改革に依つて、既にユダヤ財閥は、三分の一はゆるゆると儲けたらうと云はれてゐる。

今次の事變の頭初に傳へられ、支那ユダヤ財閥の活躍振りの深刻さを知つてゐる日本人間

に、可成りのセンセーションを引起した事件がある。

それは、上海を起點とし、杭州、南昌、長沙、貴陽、雲南を経て英領緬甸の八莫に出で、緬甸鐵道に連絡しようといふ、五千五百支里に亙る大鐵道の計畫である。費用は略十四五億元と見つもられてゐるが、十二ケ年も掛るのだからもつと必要となるかも知れないものだ。

この計畫には、三つの秘められた意義がある。その一は揚子江沿岸の大富源を掌中に納める事、その二は、上海の將來を想ひ、對支貿易を印度を通じてなさんとする事、その三は、對日戰術である。即ち、武器を印度から持込まうといふのだ。勿論この資本も、サツスーンが引受けるのである。

この間中、南京政府の財政部長孔祥熙が、日本をデマリながら戰爭資金集めに歐洲各國を巡歴したが、要するに反日ユダヤ財閥、政治家を訪問して歩いたのであつて、そのプランは宋子文と上海ユダヤ財閥とが、談合して拵へ上げたものであらう。

上述のやうに、ユダヤ財閥は支那にユダヤ帝國を建設しようとする程の勢で、支那のユダヤ資本化を企圖してゐる。

この間の西安事件まで、彼らの傀儡となつてゐたのは蔣介石であり、今日彼らの使徒となつてゐるのは宋子文である。

リース・ロスの幣制改革は、銀を生命から二番目に大切にしてゐる支那民衆から、銀を全部取上げ、その代りに、頗る危険な蔣政權下の紙幣を與へたものであるが、英國とユダヤ財閥は、この劃期的幣制改革に依つて、蔣介石政權の存續を保證し、日本の北支進出を巧に阻まうとしたのである。

だが、敗戦の今日に到ると、紙屑の如き幽靈紙幣を握らされた北支否支那民衆こそ、まことに哀れで、ユダヤ財閥の手にうまく乗せられて了つたのである。

西安事件の時、支那の經濟的破滅を救つたのもユダヤ財閥であるが、今次の事變に於て支那の經濟的破産を食止めてゐるのもユダヤ財閥である。

かう觀て來ると、今次の事變で抗日支那をさへへてゐるのは、ユダヤ財閥だといふ事になり、支那を昏迷させてゐるのも、ユダヤ金融資本家だといふ事になる。支那の地圖に全面的に滲み出たユダヤ財閥の血色の手型は實に大きい。

支那に投資してゐるユダヤ財閥の總本部は、上海にある。

その首領は、英系ユダヤ人のイー・デュー・サツスーンであつて、勢力家中には、ヴィクタ
ー・サツスーン、カドリー、ハードン、エズラ、トルイ等がある。

これらのユダヤ財閥を取巻く者を、對支對日だけの範圍に限つて見ても、ロンドンのロス
チャイルド、サツスーン、ラファエル、パリのカモンド、フオルト、アメリカのフレールス、
セグリマン、ジアリー、ダザート、香港のチエルチエーター、そして國際聯盟系のアブノー
ル、ドラモンド、ハース、コンメン、ライヒマン、ベネツシュ、ソルター、イーマンス、レ
ーゲング卿、サイモン、レーゼ、フェツセンデン、ラムプソン、シムプソン、リトヴィーノ
フ、それから又フリーメーソン系のウイルソン、ルーズヴェルト、顧維鈞、王正廷、顏惠慶、
蔣介石、宋子文等々、實に多數に上る。

こゝには一々、役名は書かなかつたが、皆な諸賢が國際的に御存じの名士ばかりである。
最後に、ユダヤ人が占領してゐるフリーメーゾンの目的は、自由平等博愛をモットーに、
君主制の廢止とインタナショナル共和国創立にあるといふ事を一言して、今後支那のユダヤ

財閥の動向に注目されん事を望んで置く。

第百一十二号

新興アジア民族論

六六

一

今日アジア民族の協和と、新アジアの建設の問題が、事新らしく取り上げられてゐると云ふ事は、第一次世界大戦前後のアジア民族問題と比べると問題の内容と意義に大きな進歩があるのである。

日露戦争以來、アジア民族の一切の問題は、全部のアジア民族が、それをはつきりと認識してゐると否とに拘らず、大日本帝國の發展の線に副つてゐるのである。大日本帝國の、進歩的な歩みこそ、アジア民族のホープであり信頼的であると同時に、アジア民族の將來の

大發展を明示するものである。

日本は、日露戦争の勝利に依つて、歐洲の衰へたる餌食であつた全アジアの民族に、獅子の自覺を與へたが、今次の支那に於ては、更に深刻に更に積極的に、アジアの現實に打突つたのである。

支那を、そして印度を、そしてアジア全體を、歐米ソ聯のはがひ締めから解放して、どう導いて行くかといふ事は、躍進大日本の使命の問題であると共にアジア千歳の問題である。

言ふ迄もなく日本帝國は、アジア諸民族の協和と進展の旗手であり、アジア永遠の平和樹立の盟主である。この事は自他共に許してゐるところであるが、さればこそ尙更に、今次支那事變の成果の意義は、益々重大なのである。

アジアは、支那の唐の文化、回教アッバース朝のサラセンの文化等の輝ける先驅的文化の華を咲かせ、疾くよりユダヤ的白人文化を教導したのであるが、これら精神文化は、白人種の物質文化に取つて代られ、その科學主義と資本主義と自由主義政治とに、不斷に壓迫せられ、搾取され、侵略せらるゝ衰へたる小羊の悲境に投込まれて了つた。僅かに極東の皇國大

日本だけが凡ゆる難關を突破して、太陽の立場を持ち、全アジアのホープとして今日の隆運を成したゞけである。

が、それだけに、日本に襲來する風は強い。暴雨には槍が交つてゐる。

アジアは、イスラム王國及び孔子の支那、佛教の印度が、破壊的自由主義的人間機械觀的獨善的猶太思想を根幹とする西洋文化に依つて攪亂され侵略せられた爲め、十世紀の永い間西洋の物質的植民地となり、その陰謀の犠牲となつた。

そして其悲惨な状態は、日露戰後就中眠れるアジアの獅子の敢然立上つた第一次世界大戰後に於ても、依然として續いてゐるのである。第一次世界大戰後、帝政ロシアの革命を機會に、國民的英雄ケマル・パシヤを有するトルコ、そして回教徒の優れた政治家ジエーマル・ウツチンやソザ・カンを持つたペルシヤが獨立の形式を得、引續いてアフガニスタン、エジプトが年來の希望を達成したが、然しその孰れもが、歐米帝國主義及びソ聯の野望と政略の網の中にある。イラクにも、國民的志士バクル・シドキーが現はれ、アラビヤ統一の夢を抱いて英國に立向つたが、昨夏ユダヤ人の兇手に暗殺され、雄圖空しく挫折して了つた。又、ア

ラビヤは、常にユダヤ教徒に依つて擾亂され歐洲帝國主義の野心のメスでずた／＼に切苛なまれて、統一の機を得ず獨立の民族的熱望を破壊蹂躪されてゐる。最近では、インド、エジプトに刺戟せられ、民族の血の結合である統一運動は、可成りに白熱してゐるが、その闘士はいつも英國の近代武器の餌食に終つてゐる。

けれ共、その爲め、却つて民族精神はより高く強く燃え立つてゐるので、白人の羈絆から解放される日もさう遠くはあるまい。

凡て問題は、民族の結合、團結の力、國民精神の宣揚に懸つてゐる。即ちアジア精神の問題だ。

新興アジア民族の自覺と矜持は、假面的、物質的、機械的、自由主義的、個人主義的、共產主義的共同運命觀に對して、道義的、創造的、平和的、美的なアジア精神を傳統的に持つてゐることである。

慈悲、仁道、平和、正義、創造は神道の國、孔子の國、佛教の國、イスラムの國、ヒンズーの國の凡てを通じての、アジア精神の美であり誇りであり強さであり輝きである。

殊に、アジアの指導的精神たる可く運命づけられてゐる日本精神は、印度に發生した佛教を、靈知と無我と倫理の宗教と同化し、支那の孔子の教へ中の唯物的方面を、忠となし正義と化し、西洋人の人間機械觀を東洋哲學風に藥籠中に納めた。

然し、世界を市場として、その商品の如く、而も功利的慈愛と似而非博愛と自由の名に於ける社會主義を孕んで潜入したユダヤ的キリスト教は、つひに日本の精神的糧には何ら溶け入るに至らなかつた。たゞ、はつきりと西洋的民族意識と、アジア精神との根本的差異を見せたゞけであつた。

だから、これを民族精神への影響を主として觀ると、キリスト教は支那に流入して匪徒暴動（長髮賊の亂の如き）を惹起し、ボルシェヴィキを案内し、軍閥に歐米依存思想を植ゑつけ日本に於て、自由主義と社會主義を誘導したに過ぎなかつた。従つて日本は、先づ佛教の輸入された事は、悦ぶべき事であつた。

他の回教國では、西洋意識の侵略と支配の前ぶれであつた事は、キリスト教國のアジア壓迫史が、如實に物語つてゐる。尤も、キリスト教を指導して、アジアへの陰謀を爲さしめた

ものはユダヤ教徒であつた。ユダヤ教の最後の目的は、世界のユダヤ思想に依る破壊と統一であつて、この思想はボルシエヴィズムと共通のものである。従つて、一概にキリスト教を非難する事は當らぬかも知れぬが、然し、同じ「慈悲」を説いても、佛教と甚だ相異のある事は、東西の民族精神の根本的相異で、蓋し已む得ぬところであらう。

が、扱て、ユダヤ的キリスト教徒が、アジア民族の間に、ヨーロッパの政治、經濟、文化の凡てを植つけようと努力したにも拘らず、アジア精神はつひにアジアの爲めの精神を忘れなかつた。

それは、アジア精神が、不撓不屈の大精神であつて、不斷に創造的新興的精神たる所以であると思ふ。

二

一七九八年夏に行はれたナポレオンのエジプト遠征は、ナポレオン自身はイギリスの反撃に會つて失敗に終つたが、この野望は近東に於けるイギリスの地歩を固めしめる役目をした

のみならず、當時の列強たる英露佛獨伊墮等をして、近東に向つて新らたなる興味をそゝらしめた。

「世界文化史大系」を著したH・Gウエルズは、ナポレオンのこの近東から印度へ伸びるルートへの野心を、シイザーを猿真似した大山師的行動だと非難してゐるが、この遠征あつて以來約一世紀に涉つて、近東が歐洲の野望の嵐に吹きまくられた事は事實である。

この列強の野心は、領土的野心が中心であつただけに、猛烈且つ執拗を極めた。そして彼らの陰謀と衝突は、イギリスを主人公とするユダヤ的陰謀が達成するまで、繰り返し繰返し續けられた。だから、ハンス・コールの言つてゐるやうに「世界大戰に到る十九世紀に於ける歐洲諸列強間の戰爭の原因は凡て此處に胚胎すべき禍根があつた」のである。

世界大戰前のドイツとオーストリアの野望は「ベルリンよりバグダッドへ」であつて、即ち、その勢力を小アジアを通じて東方に擴大しようと策してゐたのだ。これに對して、アジアに大野心を持つロシアは、コンスタンチノープルを足だまりとして、セルビヤからアドリヤ海にまでそのスラヴ勢力を伸ばさうと企んでゐた。

それより前、イギリスは、アメリカを中心に衝突を續けてゐたが、印度でも衝突を繰返してゐた。白人が、アジア殊に支那印度の豊饒な富源と廣大な土地に目をつけはじめたのは、十三世紀に現はれ、世界の野心的知識階級を刺激したヴェニスの大旅行家マルコ・ポーロのアジア旅行談が廣く愛讀されるやうになつてからである。

が、歐洲列國の東洋への政治的經濟的野心が積極的になり、列強の互間の鬭争が益々熾烈となつたのは、ヴァスコ・ダ・ガマが、喜望峯廻りの大航海に成功したのを機會にしてであつた。

當時のインド貿易は、アラビヤ人の獨占事業であつたが、アラビヤ人はポルトガル人に海戰で敗北して、已むを得ず手を引いて了つた。やがて十八世紀がはじまると、ポルトガル人に代つてアジア貿易を支配してゐたオランダ人に、物凄い強敵が現はれた。それは言ふ迄もなく、歐洲の狼虎フランスと英國とだつた。

十八世紀のインドには、もうバベル・アクバルやアウラングゼブの蒙古帝國の力は殆ど残つてゐなかつた。十二世紀の末葉に、支那の北方の回教區域フン族とトルコ族との間から、

突如として、蒙古族が立上つたが、この勤勉節儉で勇猛果敢而も政治的な一族は、英雄デングスカン及其の血統に依つて代表され、その雄圖は壯大にして、北支の全帝國と西北タータル人の西夏帝國を占領したのを手はじめに、トルキスタン、ベルシャ、インドを支配してゐたカリスミヤン帝國を打破り、ロシア軍を破つて黒海北岸に至り、全ロシアとポーランドを征伐して了つた。だからアラビア、エジプト以外のアジアの回教國は、デングスカン親子の領土と化して了つたのである。

その後、新帝國は分裂したが、クブライ治下の元朝と、インドに對する勢力は可成り永續した。つまり佛英はそのインドに對する蒙古族の勢力が衰へたところへ、乗込んで來たのである。

歐洲列強のアジア征服の手段は、最初は商人として入り、次に教會と新聞を植つけたのである。この時の英國の所謂「商人」の代表者は、エレザベス女王下に組織された、海賊的からはつきりユダヤ的となつた東印度貿易會社であつた。アジア回教徒の弱體に乗じてインドを中心にアジア各地へ入込んだのは、英國の名に於けるユダヤ人だつた事は、現在ユダヤ人

に喰荒らされてゐるインド、支那をはじめアジアの回教國の狀態を想ふ時、彼らの陰謀の深刻なるを熟々思はされるのである。

三世紀の永きに涉つて、アジアは白人の好餌だつた。従つて、白人列強の戦争の製造所だつた。

しかし、アジアを救ふ者が結局、アジアの共存共榮とその永遠の平和を理想とし目的とするアジア人である事は、限りなく穢されながらも、尊いアジア精神だけは捨てなかつたアジア民族の「現實」が何よりも雄辯に語つてゐる。

三

日本を例外として、他のアジア民族はその輝ける精神の宣揚を忘れてゐた。それは恰かもヨーロッパのエゴイステイックな野心の嵐と、形式的物質的文化の流行の下に、ちつと躡踏してゐたやうなものであつた。

そこへ、三つの立上りの機會が到來した。

その一つは、前述の日露戦争の日本の大勝利であり、その二はロシア革命であり、第三は今次支那事變の大日本の大勝である。

その一の場合は、僅かなアジア人に依つて案外容易に、最も強大を誇つてゐたロシア大帝國が惨敗せしめられたといふ事實で、この刺戟と影響は、全アジア民族をふるひ立たせたのみならず、邊境の地アフリカにまで及んだ。

ロシアの大作家ドストエフスキーは「作者の日記」の中で「偉大な民族は總て彼らの中に、さうだ、唯彼らの中にのみ世界の救済があること、そして彼らは只凡ゆる民族の先頭に立つて進み、總ての民族をしてその豫定された最後の目的に導くためにのみ生きてゐる事を信じてゐる。我々は最後の宣言をするつもりだし又出來ると云ふ偉大な自負と信念こそは民族の最高生活の旗幟である」と云つてゐるが、これはそのまゝに大和民族にあてはまるのである。

ロシアは、その歐化主義とロマンチツクな國家主義民族主義を、アジアに影響さすべく無力であつた。といふのは、ヨーロッパ人の眼で見ればロシアがアジア的であり過ぎたからだと見るからだ、實はロシアはアジア精神に常に壓迫されてゐたのだ。

だから、ユダヤ思想のボルシェヴィキの如き破壊思想がロシアによき住居を見つけたのである。ロシアが、スラヴ人が創造的精神文化に生きるアジア人に遠い理由がこゝにもある。それは後の問題として、日露戦争が、どんなに深くアジア民族に影響したかと云ふ點については、吾々は感激を新らたにしながら、もう一度考察して置く必要がある。

當時インドで策動してゐたエフ・シー・アンドリュウスは、次のやうに報じてゐる。

「政治的地平線を觀察してゐたものに取つては、一九〇四年の末に東洋に於ける偉大な變化が間近に迫つてゐることは明瞭に分つた。強大な暴風雨は急速に來り、空には稲光が閃めき出した。日露戦争は周圍の諸民族をして身を乗出して彼等の將來を待ち望ませた。興奮の波濤は北印度を越えて進んだ。最も遠隔の村落の住民でさへ、夕方仲間と同席すると日本の勝利の話をした。長年西アジアに住んでゐた或るトルコの領事は大陸の内地では到る處最も無智な農夫にもこの報知は行き互つてゐると私に語つた。アジアは一端から他端へと刺戟され、幾百年の夢は遂に破れたのである。世界史の新たな章が始つたのだ。デリーは回教徒および印度教徒が彼等の見解を容易く決定し得た會合地點であつた。回教徒はロシアの敗北を

主として領土的見地から觀察した。この敗北は地球上のキリスト教諸民族の擴大を制限するかと思はれた。印度教徒はこの問題の深い意義を見出した。アジアの昔日の偉大と壯嚴は決定的に復活したやうに思惟され、アジアを喰物にする歐洲人種の利權は遂に停止を喰つたやうに思はれた。セイロンから日本に至る全佛敎國の思想と生活は普通に結ばれるだらう。印度教は再び古い精神文化の實を、人類幸福の爲めに創造出来るのだ。この夢と幻想を境として西洋への隸屬の日は過去となり、而して獨立の日が來たのだと云ふ悦びと希望に雀躍した。この希望のあけ方を準備する爲め多くのことが行はれた。兎に角日米の勝利はこれらの凡てをはつきりと事實としたのである。〔ハンス、スーンの「アジア民族運動」より〕

この巨大な影響は、確かに事實であつた。

その影響の現はれは、既に一九〇五年に於てエジプト、印度に於て見られる。又、北アフリカの回教的動搖と、トルコ、ベルシヤ(イラン)の回教徒の立上りも、ロシア帝國を巧妙に窮地に陥入れたイギリスの壓迫に及んだとは云へ、その精神は、獨立まで續いたのである。

第二のロシア革命は、ボルシエヴィキの自負と陰謀とに拘らず、却つて政治的なトルコ、

イラン等のアジア人に、その波動を利用された事に終つた。即ち、トルコ、イランは、仇敵帝制ロシアが倒れると見るや、ロシア革命派の煽動と鼓舞を利用し、トルコはギリシヤとイギリスから解放され、イランも續いてイギリスから獨立したのである。

その後、今年春までトルコは、親ソを政治的手段として來、イランは歐米の石油爭奪戰場と化してゐたが、支那事變以來アジア精神を刺戟され、最近に到つてトルコは反ソの肚を極め、イランも暗雲低迷してゐる。

従つて支那事變の大日本帝國の勝利が、一度び目覺めたアジア諸國に對する影響は日露戰爭以上に深大であつて、イラク・サウデイ・アラビヤの獨立の絶好のチャンスとなる事は、疑ひのないところだ。

スターリンは、最初アジア民族のボルシエヴィキ化を空想して、アジアからアジア的なものを追放しようと思ひ「ロシア革命の感激とアメリカの實際的精神との結合、それがレーニンズムの實行の本質だ」と云つた。これは、ユダヤ思想の極左と、ユダヤ的ヨーロッパ思想の右翼のカクテルの中へ、哀れなアジアを投り込まうとしたものだ。

そんな空想と事務と陰謀に、眞のアジア精神が誤魔化されなかつたのは、當然であつた。しかし、キリスト教的社會主義と、歐米の自由主義が橋渡ししたユダヤ的革命主義は、一應日本の淺薄な思想的オボチュニストたちにも流入し、支那の國民精神を忘れた白人盲拜家にも影響を及ぼした。日本の誤まてゐる者はさすがに疾く清算したが、國民精神、民族精神の目覺めに、歐米の煙幕やソ聯の眼帶を掛けられてゐる支那の一部の歐米依存者及赤色民衆は、未だ誤まれる迷夢の中にゐるが、アジア民族である限り、やがては必ず目覺めるであらう。今次の支那事變は、大和魂の試鍊と發展であると共に、アジア精神全體の試鍊と發展である。

この機に際し蔣介石國民政府の歐倚容共の自殺的抗日の眞只中から西北回域の五馬聯盟を中心とする七千萬回教徒が、その本來のイスラム（平和）精神に依つて、防共、新政權支持、親日、獨立をモットーとして決然立上つたといふ事は、アジア和平の將來の爲め頗る意義の深いものがある。

支那西北邊境部回教徒にして、開祖マホメットの精神そのまゝに眞に團結し、アジアの爲

めのアジアの聖義に立上るならば、外蒙、中央アジアの共匪勢力に對する巨豪な一大トーチカとなると共に、印度、アフガニスタン、イラン、トルコの同志と堅く握手して「アジアを襲ふ狼虎」を排撃する時は、アジア回教徒は新興の名に於て更生するのである。

今次支那事變をチャンスに、東亞に於て支那回教徒、印度回教徒、印度教徒が、防共に反キリスト教團運動に立上り、近來に於てトルコが赤露勢力と絶縁し、イラン、エヂプト、イラク、アラビヤが反英意識を強化し、北アフリカ的回教徒が反佛デモを敢行してゐる（一九三八年四月十日東朝）といふ状態は、白人に取つて一大驚異であると同時に、世界の政治、經濟、文化、思想の地圖に深大な變化を齎らす豫告である。

それにつけても、全アジア民族の進歩的指導者たる大日本帝國の使命任務は、益々重大だと云はなければならない。

四

「新興」の名に價する民族は、凡て創造的でなければならない。こゝに創造的と云ふのは、

その民族の精神に、不斷に創造美の存することである。

アメリカは、英國から獨立した一大資本主義國には成功したが、ヨーロッパから離れて獨創的な一大民族となつたのではない。要するに、ユダヤの資本と、白人的自由主義を奉ずる反アジア帝國に外ならぬ。單なる中年英國に過ぎない。

民族精神の新鮮老朽は、その民族の物質的歴史の長短には關係なく、要は如何なる内憂外患に襲はれても、精神それ自らの力に依つてそれを清算排除して、常に新興の意氣を以て突進してゐるか否かにある。

従つて、復興とか復活などと云ふには、餘りに創造に燃え、銳氣潑刺たる新時代精神である。

だが、この精神の根源大本は、時と處に依つて變化するやうなものでは勿論なく、永遠のアジア的大精神なのである。永遠にして而も生氣横溢、萬化にして一意なる大精神こそ、アジアの民族精神である。

その最も偉大な例は、日本精神が啓示してゐる。

歐洲には、フランス革命とか、ロシア革命とか云ふやうな、物質的ブルジョア變革や、唯物的變革はあつたが、民族はその爲めに、何の進歩もしてゐない。却つて、民族精神を弱_調にし、分裂させただけである。

それはフランス革命やロシア革命の影響を見れば判る事であつて、フランス革命は自由の名に依つて、國民精神を階級的に分析し、大本から遊離せしめ、ロシア革命は、國民精神の價値を、唯物辨證法の石臼でインタナショナルな、歸るところなき灰と化して了つた。

殊に、民族のプロレタリア的解放を叫んだボルシェヴィキ革命は、あわて者の民族に根幹を失はしめ、ユダヤ流の祖國なき國際ルンペンとして了つた。

それは宛も、フロイドの精神分析學が、人間の個人的精神を、民族精神と分離して分析に分析を重ねることに依つて、人間を性_{セクス}の踊つ子と化して了つたやうなものである。

凡ての唯物的變革の目的は、自由主義と國際主義の名の下に、統一あるもの、國家あるものの、民族精神あるものを破壊し分散せしめる事にある。現在の抗日支那を觀ても分る通り、赤化勢力の浸入したところには、必らず祖國への反逆と民族精神の喪失と國家意識の抛棄が

伴つてゐる。民族精神を、無理に、固定的なものと観、一時的生命のものと解し、又對立なきものと理論づけるところに、マルクス主義民族論の陰謀があるのだ。コミンテルンは、支那人に、民族解放と國際主義を教へ込む事に依つて、アジア民族精神を脱落せしめ、東西兩人種の久しき鬭争を忘却せしめ、祖國を赤化の中で解消せしめんとした。

民族精神を失はしめること、これが先づ共產主義の破壊工作の第一歩だ。

が、共產主義の此の努力と工作は、宛も十九世紀に於て、ヨーロッパがアジア全土を政治的經濟的文化的宗教的に征服しようとしたことがつひに畫餅に歸さんとしてゐると一般、アジア精神の前では、必らず無駄に終るものである。

ヨーロッパが、最近百年間にアジアに及した影響のうち一番大きなものは、ヨーロッパの十九世紀中に發展した國家主義であるが、その影響は只政治地理的にあつただけで、精神的には何の及ぼすところもなかつた。それどころか、日本などに於ては、却つてヨーロッパでない國家主義、民族意識が鬱勃と發展してゐたのである。

こゝが形式的に國家の出來上つてゐる西洋と精神的に國家の成立してゐる日本と大いに異

るところである。同じ國家總動員でも、イギリスなどと日本と全く本質的に相違する所以である。

アジアは、ヨーロッパ文化の影響を受けると同時に、その陰謀の溫床となつた。而も文化のよき方面は攝取同化したが、陰謀は見破つて了つた。それは精神力が衰へてゐなかつたからだ。

イスラム教徒は、ヨーロッパの侵略に遭つて、キリスト教の形式的影響を強要された。その事は多く教育機關と新聞の宣傳に依つて爲された。然し、それも只形式方面にとゞまり民族主義そのものは決して影響を受けなかつた。それどころか、却つて國家の宗教は、民族主義の精華だといふ事をはつきり自覺したのである。これを政治的に見ると、時に利非ず歐洲文化の強要の下にはゐたが、民族としてはいつでも立上る事の出来る餘裕と覺悟を持つてゐたのである。無言のうちに、その不屈の精神を以て、アジア國家を守護してゐたのだ。

東洋の宗教改革者は、祖國の解放と東西の融合を目的として來た——この西洋の學者の言ひ方は、ある程度まで當つてゐる。しかし、これを「民族主義者」といふと、大分當つて

來、「祖國の發展」と「アジアの共存共榮と永遠の和平の爲め」「犠牲的に聖戰して來た」といふと、すつかり當てはまる。

私が、現代の民族的政治的經濟的思想的文化的に目覺めたアジア民族のことを、敢て「新興」と云つた意味は、上述の概説でも理解されたと思ふが、こゝに云ふ新興とは、アジア民族の爲め、常に清く不斷に新らしく強く突進してゐるアジア人の積極的な意思を指差してゐるのである。

私はこの小論文に於て、新興アジア民族の精神美とその發展の悦びに就いて概説したが、近く、東西の人種民族の精神的肉體的健康の現状を討究し、「アジアの生命の發展」に就いて書いて見たいと思つてゐる。

日本の思想界を攪亂したるユダヤイズム

一

最近憂國の士の間で問題となつてゐるやうに、我國の最高學府帝大の法經濟學部が、傳統的に「排日」「反國體」の學問の本營であつたかどうか速斷は出來難いが、然し、ユダヤ思想の溫床であつたことだけは慥かである。

國漢を主とする科は例外だが、他の學部と來たら、何でも彼でも、歐米の學者、横文字の崇拜者ばかりである。學者を畏敬するのは先づよしとしても、横文字盲拜に到つては寧ろ滑稽である。而も、同じ横文字の本でも、歐米の學者の書いたものなら、可成り下らないもの

でも熟讀するが、日本人の書いたものとなると、外國で評判にならないうちは讀まないといふ風がある。殊に、吾々のやうな私學獨學の者の著書などは、敢て默殺する事を以て、街學の一方法と考へてゐる様子さへ見える。

これなども、専らユダヤ思想の影響であつて、この弊風たるや宛もユダヤ教徒が、他民族排撃を信條とし、徹底的に獨善的なるが如くである。

ユダヤ思想こそは、表面はかのフリーメーソンが代辯してゐるが如く、自由、平等、博愛で假裝されてゐるが、實はユダヤ民族の他民族統一の復讐を目的とする慘虐破壊革命をモットーとするロシア思想であつて、大和魂の代表する日本精神のやうに、道義心の上に立つ眞の世界平和を望むものではない。

帝大は、永い間、歐米の學風を、無批判に盲信することに依つて、つひに日本精神と對蹠的なユダヤ思想を輸入して來た。即ち、帝大の學者及マルキスト、自由主義者らは不知不識の間に、この尊い日本精神を、ユダヤの陰謀に依つて、沙漠色に塗りつぶされて來たのである。

ユダヤ思想は、傳統的に、相反するものを同時に持つてゐる。この相反する思想を同時に持つと云ふのは、自然の眞理を敢て二分せんとするやうなもので、如何に頑強にねばつても結局自己撞着を惹起して了ふので、それは丁度ユダヤイズムかぶれの學者思想家などが國家を口にしながら本來の國家を忘れて了つたり、平等を唱へながら獨善的な排他主義者になつて了ふのと一般であつて、この矛盾故に、ユダヤ人は千數百年の忍従と結束と陰謀の歴史を通じて、つひに國家を樹て得なかつたのである。

日本帝國には、絶對に入れてはならぬ熱病的思想である。

ユダヤ人は、その宿命の故に、多年待望のユダヤ帝國を持たないから、民族、同志團結機關に、フリーメーゾンを利用し、たうとうこの國際秘密結社に君臨して了つた。フリーメーゾンは、合言葉に自由、平等、博愛といふ有難さうな言葉を使用してゐるが、これは彼等の最後の目的であるユダヤ主義の世界平和を建設しようとする方便であつて、この人道的な美しい題目を合唱しながら、世界の君主政體を破壊し、凡ての國家をデモクラシー化さうとしてゐるものだ。

それが證據には、ユダヤの陰謀であつた世界大戰以來、歐米のフリーメーソン國家は、着々としてデモクラシー國となつてゐる。

今日、日本精神宣揚の妨害となつてゐるのは、此の神出鬼没のデモクラシーである。所謂自由主義とは、このデモクラシーなるユダヤ思想から由來するものである。

現代何と、デモクラシー思想家の多きことでありしか。則ち、ユダヤ思想の御先棒を擔がされた譯けで、甚だ遺憾に堪えない。

ユダヤ主義者は、金の欲しい者は、フリーメーゾンへと宣傳し、思想家はその特權として「自由主義者」たる可しと宣揚してゐる。そして又、民族は、須く國際主義なれ、と主張してゐる。

三者の一は、ユダヤの屈伏であり、その二は、國民精神の喪失であり、その三は、國家分散の思想である。

凡て、反ナシヨナリズムだ。反國民文化だ。ユダヤ思想は、先づ以てナシヨナリズムを失はせることにある。

最近起つた、帝大内の人民戦線問題なども歴史は遠いと想ふ。

問題は、ナショナリズムを忘却したことから出發してゐる。

日本にも、フリーメーゾンの會員準會員が、少なからず有ると聞くが、何にも知らぬうちに、準會員になつて了つた思想家こそ、何にも知らぬうちに、病毒を流行させるから、最もおそろしいのである。

ナチス獨逸が、文化國營を第一に絶叫した意味が、よく判る氣がするのである。

二

ユダヤ人は、現實の加工的國籍如何に拘らず、矢張りユダヤ人である。どんな立場にゐても、イデオロギーの宣傳は忘れない。

前述の、傳統的遺傳のまゝに、いつも矛盾した二つのものを、世界に宣揚してゐるのである。何らかの象徴をよるこぶ宗教的儀禮と自由主義、そして、財閥達成と社會主義、博愛をモットーとする平和主義と世界攪亂の革命思想。このことは、彼らが、アメリカとソ聯を操

つてゐる事が證明してゐる。現在の中華民國などは、その兩者を以て、いゝ様に引攪き廻されてゐる形である。

我日本も、日露戦争の當時、彼らの魔手を伸された。賢者周知の如く、日露戦争の資金は英米のユダヤ財閥から出たのである。が、彼らは決して正義日本を仁援したのではなく、唯將來の日本の利用價值を達觀したのである。滿洲事變の直後、日本が滿洲投資の好餌に依つて、彼らに利用されなかつたのは未だしもである。尤もその仇は、今次の支那事變に於て、在支ユダヤ財閥の抗日支那絶對援助の一手に依つて報復されてゐる。

日本の念願である、東洋平和を攪亂してゐるのは、誰でもない。血迷へる歐米ソ聯倚存の抗日蔣政權を支持後援してゐるユダヤ財閥のユダヤ思想なのだ。

ナチス親衛隊參謀部員ワルテル・パウシユ博士は「國際政經學會」講演會席上のドイツ反猶運動の御講演中で、

「殆ど凡ての獨逸新聞は嘗てはユダヤ人の手中に入り、獨逸の文化生活は本質の異なる精神や道德を通じ、ユダヤ人に依つて毒され、攪亂せられ、斯くて獨逸國民もその無節操無道德を

以つて毒害したのであります。一時は各般の學術、劇、映畫、ラヂオ、文學、美術、音樂等凡てユダヤ人の影響を受けたのであります。又經濟方面に於ても亦ユダヤ人はその數の比較にならぬ程度迄獨逸經濟を撓亂し、之に依り獨逸國民から搾取したのであります。且つ又妨害なく之等のことを遂行せんためにユダヤ人は政治に關與し、當時は獨逸政府の重要位置を有する人々の背後に立つたのであります。ユダヤ人は獨逸人にとり最も有害な自由主義を注入し、マルキシズムや共產主義思想を擴め、當時の政黨を籠絡したのであります。」と云つて、嘗つてドイツ人が、國家、文化、經濟、生活に涉つてユダヤ人の爲めに蒙つた深刻な損失に就いて語つてゐる。

我國は、積極的にユダヤ人を迎へたことがないので、これ程の具體的な損害は受けなかつたが、然し、明治時代就中日露戰爭前後以來、思想界はユダヤ思想輸入の歴史なのである。日露戰爭も、觀方に依つては、ユダヤの陰謀であつて、英米のユダヤ財閥は、戰爭中經濟的に日本を援け、媾和會議に於て、ユダヤ人の利益に於て、露國を救つてゐる。日露戰後の外交戰は、凡て新興日本を壓迫するユダヤ人の陰謀に終始してゐる。

現在の中華民國などは、かの阿片戦争以來ずと、ユダヤ財閥の喰物になり、ユダヤ思想で攪亂されてゐる。その損害はドイツの如き國民精神の團結なき中華に於ては、ドイツ以上である。近代の中華の英雄といはれる孫逸仙が、既にフリーメーゾンの輝ける會員なのだから、政治、經濟、文化の各方面に、ユダヤ思想が潜入することは當然である。

ユダヤ人は、一方に於て其巨大な資本力を以て中華を骨の髄まで喰はんとし、一方に於ては、本來のユダヤ思想である革命的ボルシェヴィキ思想を流入してゐるのである。永い間の陰謀を以て、ロシヤを赤化したユダヤ人は、次は中華を破滅させる事に依つて、東洋の平和を攪亂し、日本をもユダヤ化さうとしてゐるのだ。

ユダヤ人は、いつもある國家の國民精神を、ユダヤ思想で破壊し、ボルシェヴィキ化から自由主義化して、精神的にユダヤのものとして了ふか、その資本力を以て、他國中へユダヤ王國を作つて了ふか、その怖るべき慘虐性を振つて、戦争や内亂を惹起して、その間に凡てをユダヤ化して了はうとしてゐるのだ。

世界大戰以來の、日本の思想界は、宛らユダヤの陰謀の上にあつた。それは、關東大震災

前後からの勞働運動の歴史、無産黨の動き、プロレタリア文化運動の歩み、反日本精神運動の活躍振り、反宗教運動の方向、そして日本共產黨の擴大、最近の人民戦線派の潜行等々が如實に物語つてゐる。

現代の我國のインテリや多少經濟政治文化の問題に興味を持つ勞働者農民にして、ユダヤ思想のどの部分にかかぶれない者が、果してどの位あつたであらう。

今日にして顧みてこの事を思ふと、戦慄を禁じ得ないものがある。而も、ユダヤ思想の波濤は、我國の四周に浪打つてゐる。否、それどころか、ユダヤ思想は相當根強く、執念く、我國の各部に巢喰つてゐる。帝大内に、共產思想家や反日本精神の徒が居たといふ事は、ユダヤ思想流入の一つの窓が開いてゐたに過ぎない。ユダヤの陰謀が、常に世界の凡ゆる處で畫策されるやうに、ユダヤ思想の風は、世界の空をいつでも吹き捲つてゐる。

只それを防禦し、追拂ふ力は、國民精神の強化と宣揚あるのみである。この日本精神の宣揚こそ、ユダヤ思想を征服する力である。

三

私は、我國に潛入したユダヤ思想が積極的な變革的活動を起すことが出来なかつたと云ふ事は、根本的には日本精神が反ユダヤ的で搖ぎなかつたからであるが、一面には我國の資本主義の發達が頗る跛行的であつたこと、明治維新以來の政治の歴史が、ユダヤ思想の自由民主主義を取入れ政黨を造り、資本主義と共に動いて來たにも拘らず、常に日本的な大道だけは失はなかつたからだと思ふ。

それと同時に、矛盾を許さぬ日本の國民性が、本來矛盾そのものであるユダヤ思想を、本當に血にまでこなさなかつたからだと思ふ。幸に、只眞似をして來ただけである。

だが、彼らの陰謀や宣傳に上せられて、眞似をして來たにしては、身に受けた傷は相當深かつた。たとへばユダヤ人の、自己民族のみの世界充滿を策しての産兒制限に上せられたなどは、身を以て味つた失敗であらう。又、誤まれる國際主義に煽動されて、自由主義やデモクラシーやボルシエヴィキを掴まされたなどは、精神を以て味つた苦い經驗だらう。

明治維新以來の我國の文化史は、見様に依つては、ユダヤ思想輸入史である。

新興日本は、維新以來多數の外來思想を轉入し、その影響の下に游泳してゐた。その代表的なものは、フランスの自由思想、イギリスの功利主義哲學、ドイツの國權主義、そしてキリスト教、マルクス、エンゲルス、クロボトキン、トルストイ等の思想であつた。

日露戰爭は、日本の文化を急速に進展させたが、その文化の建築材料となつたものは外來の思想であつた。

たとへば、文學の方面を觀ても、日本の近代文學の黎明は、ヨーロッパのロマンチズム運動の影響の下に、若きクリスチャンが立上つたことに依つて、曉鐘を鳴らされてゐる。

續いて、西歐の資本主義者の信條とした科學主義を母體として生れた自然主義も、直ぐ簡明に入つて來た。

而も、この二つの外來思想は、我國の傳統的國粹主義文學を窒息させて、國際主義、社會主義的傾向の文學を生ましめた。

この間に、高山樗牛、井上哲次郎、岩野泡鳴らの日本主義の提唱があつたが、世間はむしろ

ろ、新理想主義を標榜する人道主義文學に多大な關心を拂つた。この多分にトルストイ的色彩を持つ、人類本能と宇宙的意志を重んじ、人類の眞心を通じて現はれた力を尊ぶ白樺一派は、階級意識を發揮して眞に人民の中へ入つて行くかどうかといふ一線で、ユダヤ的ロシア革命の影響の許に立上つたプロレタリア文學に、華やかな舞臺を譲り、自然主義文學が、つひに愛慾描寫とデカタニズムに終つたやうに、ある時代の文學運動として終りをつけ、佛教的思想の中に解消して了つた。これから先も、輸入された思想は、全然マルクス、レーニンのユダヤ的革命思想であつた。この思想に依つて、プロレタリア文學運動が、日本共産黨の一環である政治運動にまで進み、すつかりユダヤ的變革主義になつたことは、餘りに衆知のことである。

これは、慥かにユダヤの陰謀の一つだ。

たしかに、日本精神の危険であつた。

然し、一應怪雲は去つたやうだ。日本精神は、つひに精神の正道に歸つた。

だが、このユダヤ思想は、決して全滅したのではない。否、手を替え、品を替えて、日本

攪亂を策謀してゐる。

今後の日本の思想界は、日本精神の宣揚と、日本主義とユダヤイズムとの闘争の歴史が繰りひろげられることであらう。

支那の反ユダヤ教徒の動き

I

支那の回々ホイホイチヤチヤ教徒が、今次の支那事變の中に於て、如何なる動きを示すかと云ふことは、彼らがある意味に於て、東洋平和の鍵を握つてゐるやうな立場に在るだけに、時局の重大關心事でなければならぬ。

アジアのイスラム教徒三億五千萬は、アジアの生んだ秘密教の如く思はれ、開教以來千二百年に亘つて、毀譽信反いろいろな苦難の中を通つて來たが、今日に於ては、反ユダヤ的反キリスト教的なことに於て、如何にもアジア人らしい戒律と信仰と、そして政治的意義を

持つた清教である事が、アジアの將來を想ふ識者の間に理解されて來た。

回々教イスラムは、さすがにアジア精神の權化マホメットに依り、右に征邪の利劍、左手に愛國救世尊神の經文コーランをさへげて、アジアの爲めのアジアの聖戰と布教を行つて來ただけに、どこまでも東洋魂に輝いてゐるところがある。

我が大和魂は、和魂にほんたま、荒魂あらみたま、幸魂さちたま、奇魂くしみたま、を精樞としてゐるが、マホメット教は、アジア魂を靈軸としてゐるので、どこか一脈通するものがあり、大和魂のいぶきに依つてより更生する可能性が充分に見える。

今や、大和魂の神國日本皇軍に依つて、東洋平和の爲めの聖戰が闘はれてゐるの時に當り會ての日清戰爭の當時、清朝とキリスト教國の煽動に遭つて反日戰を戦ひ、又日露戰爭の折の日本軍の大勝利を見て、勇躍眠りを醒した獅子となつて立上つた彼らが、今次の支那事變を期して獨立防共親日をモットーとし、敢然アジアの防共トーチカたらんとして活動を開始したといふニュースは、さすが矢張りアジア人の血は争へぬと、欣快に堪へぬ次第である。若し、アジアの回々教徒の理想が、全く實現した曉は、トルコ、ベルシヤ、中央アジア、

北部アフリカ、インド、南洋、西北南支が、キリスト教國の桎梏より、完全に解放され、汎回々教徒の夢の本當のアジアのアジアが生れるのである。

最近百餘年の間、歐洲の禍根と云はれたのは、阿士曼帝國であり、バルカン問題であつたが、宗教的民族には、歐洲キリスト教國とアジア回々教國との争ひであつた。阿士曼も、十九世紀以來キリスト教國の壓迫と陰謀に依つて、頓に衰勢に向つたが、歐洲大戰後、教軍トルコ黨の活躍に依つて、士氣やうやく舉つた。

が、今回の事變に就いて、吾々が最も關心を持つのは、先づ西北支の回教徒の積極的な動きと、中央アジア、インド、アラビヤ、南洋の回教徒の反英ソの動きとである。就中、西北支那一千萬の回教徒の動向は、刮目に價する。

回教國を植民地とし、又野望を有する英國は、常に回教徒を壓迫し、敢て他教と對立させ勢力を消耗させて來た。即ち、インドに於ては、二億一千万のヒンヅー教に對して七千萬の回教徒が有るので、ヒンヅー教徒の力を削ぐ爲めに、回教徒を利用して來た。

アラビヤでは、パレスチナとアラブのユダヤ教徒とイスラム教徒との民族的闘争に於て、

常にバレスチナへ味方して、アラブ民族を壓迫して來てゐる。

然し、元來政治家の回教徒は、英國の黒い腹の底をよく見抜いてゐるので、インドの回教徒は、巧みにヒンズー教徒と結んで、反英共同戦線を張つてゐる。アラブの回教徒は、聖地メツカをユダヤ教徒及び英國から守護せんとして、生命を賭して闘つてゐるのだ。彼らはともに、マホメットと共に、光は東方よりと信じ切つてゐるからである。

回教徒は團結が頗る堅く、民族愛に燃えてゐるので、英國の壓迫とユダヤ教徒の陰謀にも拘らず、トルコ、イラン、アフガンの獨立となり、エジプトもイランと共に頑強に闘つてゐる。これらの回教國の獨立が成功すれば、英國をはじめユダヤイズムの國々は、東洋から閉出しを喰つて了ふのである。

ソ聯にも、全體的に見ると三千萬の回教徒が居ると云はれてゐるが、ソ聯は無宗教國なので、不斷に彈壓を加へ、赤化の重爆を加へてゐる。

そこで、蔣介石政權の聯共政策に依つて、赤化のどろ靴に蹂躪されてゐる、支那の回教王

國である新疆、甘肅、寧夏、青海一千萬の回教徒の動きが問題となる譯である。

殊に、新疆二百萬餘の回教徒は、五馬聯盟を主力に、反國民政府の氣勢を數回に亘つて擧げて來たところだけに、その動向には甚だ興味津々たるものがある。

二

從來の支那回々教徒は、抗日戰に参加して來た。

日清戰爭の際には、漢回の馬福祥、馬聯甲、馬良が勇將として知られ、北清事件には、端郡王、董福祥の回教徒（回匪と呼んだ）が立物として活躍し、今次事變には、五馬聯盟と稱する新疆、甘肅、青海、寧夏の馬一族の猛將を、蔣政權は躍起となつて利用しようとしてゐた。

五馬聯盟の領袖には、董福祥の長男馬鴻達、その弟馬鴻賓及び反國民政府で勇名を馳せた馬仲英、馬步芳、馬步青がゐるが、蔣政權はこれら回教徒懷柔の爲め、馬鴻賓を新編二十二師長に、馬鴻達を新編第七師長に、馬步芳は新編第九師長に、若き英雄馬仲英を新編第三十

六師長に据ゑて御機嫌を伺つてゐる。

この五人のうちで、馬鴻逵は、國民政府の宣傳に依ると、最も親蔣人物で、はじめ親ソの馮玉祥の下にあつて、後韓復榘とともに、これを裏切つて中央軍入りをなして、一九三一年に、第十五路軍總指揮となつて寧夏省政府主席をつとめてゐた者だといふ事になつてゐる。

敗退の蔣介石は、最近又十九路軍を再編成すると宣傳してゐるから、何とかして回教徒の中から、一枚加へる策かも知れないのだ。

だが、五馬聯盟の金城湯池は、蔣介石が窮餘の策として聯ソ容共策を取つた爲め、着々としてソ聯の赤靴ルートと化してゐる現狀で、堅固なイスラム教徒が、多年恨みを呑んで來たソヴェート無宗教者と今さら握手するなどは、凡そ考へられぬところである。

同じ回教徒でも、白崇禧は廣西に地盤を持つてゐるので、野心成就の爲め一時蔣と握手する事があるかも知れぬが、西北邊境の回教徒が、さう簡単に蔣介石に抱込まれようとは思はれない。それより寧ろ最近のニュースの如く、反國民政府、親目的に動いてゐるといふ方が

機會ある毎に、獨立を目ざしてゐる彼らとしては、正しい行動だと思はれる。

今日まで、アジアに野望を持つ策戦家は、皆な回教徒の懷柔利用に狂奔したと云つてよく政治行政共に手心を加へ、この宗教の特殊な習慣を尊重して來たのであつた。ことにカイゼルは、この點非常に努力した跡がある。

だが、回教徒は、纏回（纏頭回と云つて頭にタヴァンを捲く新疆南部に多く住むトルコ人種の混種）と云はず、漢回（一名東干といひ、凡て漢民族化してゐる）と云はず、反ユダヤ教的反キリスト教的で之は共にセム族の出なのだが、すつかりアジア族となつたものである——東亞魂を心底から持つてゐるから、アジア永遠の平和の爲めならば、教祖マホメットと同じ信條と目的の爲めに、身を以つて立上るだらうが、アジア魂と相反する者の爲めには、却々利用されないのである。

抑も、回ホイホイ教は、天方教とも言はれ、偶像の崇拜をせず、唯一無二のアラーの神を信仰し心身清淨の禮拜をなして修業し、克己の精神と健康獲得の爲めに斷食をなすと共に、絶対に血族結婚を排してゐる。豚や他教徒の作れるものを絶対に喰はず禁酒禁煙を行ふ等、頗る團

結の強い宗教であるから、容易なことで利用されないのである。

而も、民族的宗教であると同時に、政治、行政、軍事、文化共に教義の下にある祭政一致教であつたから、サラセンの華やかな文化時代を現出し、西歐文明を指導したのであつた。が、近代に至り西歐文化の爲めにその地位を奪はれ、曾ての先進アラビヤ文化は、つひに白人文化に蹴落されて了つたのである。

が、日露戦争の極東の日本人の大勝利に刺戟されて、非常な自信を得て、更生したのである。

最近のニュースに依ると、國民政府は露骨に回教徒を利用せんと策してゐるし、ソ聯は、對日工作の爲めに、對日密謀を名として回教徒に大彈壓を加へてゐるといふことだ。

かうなつて來ると、アジアの爲めのアジアをモットーとし信條として來た全支回教徒が、新アジアの建設の爲めに、ユダヤ思想、ボルシエヴィキ、歐米思想排撃に、勇敢に立上るのは、彼らとして當然のことであらう。

支那回教徒、否アシアの回教徒としては、今次の支那事變こそは、天與の更生の機會でなければならぬのだ。

今日支那の回教徒が、一致團結して容共支那排撃のために猛然として立上つたことは、彼らの運命の聖戰だといふことが出來よう。

3

北京政府の版圖は益々擴大され黄河以北をその隸下に置く事となり、山東省長には、現濟南地方治維會長馬良氏が任命された様子だが、この馬良と云ふ人は、曾て山西河南省方面で甘肅の馬福祥に對して、名將にして名政治家とうたはれた將軍で、日清戰爭には、抗日勇將だつたが、その日本の眞意を識つて親日家になつたやうに記憶してゐる。

支那西北部では、古くから、馬姓を名乗る者は皆な回々教徒であつて、可成り澤山の勇將名將を出してゐる。而も、これらの將軍たちは、一時は日本を敵とした者でも、いつかはアジア民族の平和と將來の爲めに、最近に到つて親日的になる傾向が頗る深い。

回教にも教派はいろいろ多岐に分れてゐるが、根本的には同じ信仰の上に立つてゐる。丁度そのやうに、信仰者の人種や民族性も實に複雑であるが、しかし、宗教關係では、驚く可き團結力を持つてゐるのである。

それは、皆な一樣にコーランの言葉の天啓なるを信じ、アラアの神を（支那では「眞主」「眞宰」といふ）信仰し、アラアの神の清淨なる奉仕者天使を信じ、豫言者を信じ、來世を信じ、一切を支配するアラアの天命を信じ、肅然たる五つの勤行を（支那ではこの勤行のことを念、眞禮眞、齋戒、捐課、朝覲といつてゐる。即ち信仰の告白、禮拜、斷食、喜捨、巡禮の謂である）行ひ、無我大慈悲の愛を根本とする道德と、不信、殺生、邪淫、竊盜、戰時の卑怯、僞證、僞誓、不孝、貪婪、魔事、飲酒、喫煙、不正なる夫妻道等の戒諫を守り、聖戦にはいつでも參加する用意と覺悟とを持つてゐる。けだし、團結力の鞏固な所以であらう。

回教徒の所謂「聖戰」とは如何なる戰爭であらうかと云ふと、イスラム主義宣揚の爲め則

ちアジア民族主義勝利の爲めに、この運動を阻害壓迫する異教徒と、信徒の安全平和を期して決戦する戦争のことであつて、嘗て教祖マホメットが、宗敵の城砦メツカを占領してイスラム主義に依るアラビヤ諸部族の統一をなさんとの志望を抱き、破邪の劍を抜いたのに始まり、この聖戦は、回教の壓迫打倒を圖るユダヤ教徒やキリスト教徒やアジア主義に反抗するものと、戦ひ續けて來たのである。

日清日露の戦争を経、歐洲戦後に至ると、アジアの風雲は愈々急をつげた。それはロシアが赤色革命に成功し大陸赤化の策謀を開始したと、ドイツを押へつけた英佛及び米のユダヤ主義國家が、支那に向つて、その巨豪な資本力を利用し野心的に殺到したからである。その後、ドイツはナチス精神を以て立派に復興發展し、イタリーはファツシヨとして、地中海に覇を成し遂げた。

この間、新疆の回教徒は、アフガニスタン、インド、支那全土、ベルシヤ、ベルチスタントルキスタン、コーカサス等の同徒と俱に中央アジアの猛烈な回教運動と聯絡は取つて來た

が、凡て積極的ではなかつた。

その重なる理由は、支那の軍閥に利用される事の多かつた點と、ソ聯の壓迫に優柔不斷だつたからである。

けれ共、滿洲國が獨立し、(略百萬の回教徒が在ると謂はれる)日露戰爭以來アジア民族の待望の強國日本帝國が、敢然アジアの盟主として乗出して來た耀姿を見ると、支那の回教徒の動きは、頗る複雑になつたのである。

やがて、不明なる白人倚存の國民政府に依つて、今次事變が勃發し、ソ聯及び英佛米等のキリスト教國の大陸に對する惡辣なる陰謀が暴露され、日本皇軍の絶對的連戰連勝と占領地の明朗化を眼の邊り見、而も、日本帝國が如何に東洋平和の爲めアジア民族の世界的發展の爲めに犠牲的に聖戰を決行してゐるかの眞摯な姿を眺めるに及んで、獨立の好機は今なりと感じ、その目的を以て今回の動向を示するやうになつたのである。

そこへ、日獨伊の防共協定が締結され、而もドイツに依つて滿洲國が承認されるや、國民政府のソ聯政策の爲め、不當なる壓迫に惱んでゐた現状の禍根をはつきり認識すると共に、

頗に横暴無殘なるソ聯の無宗教的侵略に對すべく、開祖マホメットの精神をそのまゝに、防共そして獨立の意圖を以て立上つたのである。

最近支那に於て一向振はなかつた回教徒は、日本帝國の東洋平和の爲めの聖戰に依つて、マホメットの聖戰の精神を更生した事は、大いに悦ぶべきことだ。

その本來の使命にめざめ、七千萬の教徒を糾合して、新しい極東平和の爲め、日滿と結んでユダヤ的國民政府の打倒に立上つた事は、彼らの將來の輝かしき事をはつきり知る事であると信ずる。

全支回教徒の今後の動向こそ、期待されるところである。

つひにアジア民族はアジア民族であつた事を、具體的に知らせて貰ひたいものである。

支那の回々教徒は、親日親滿に動いてこそ、その精神があるのである。光は東方より……である。

對日長期抗戰の不可と極東の將來

一

日華は、兄弟の如き親善國でなければならない。従つて、日華がその輝かしき宿命を以て握手し、極東平和成就の局面に立つたならば、極東の平和は立處に確保されるのみならず、中華は世界の虎狼的齒牙及赤禍より完全に救はれ、本來の泰平鼓腹の民たるの面目を發揮し得るのである。

今や我等の親愛なる中華は、歐米依存赤化容共の迷夢の中に轉々としてゐる。殊に、蔣介石は、自らの政權の必死なる擁護の急にして、つひに歐米ユダヤ財閥に肥肉を賣り、ソ聯即

ちコミンテルンに四億大衆の流血を賣り、盲狂の餘り自國本來の傳統と、中華民族の東洋的精神を忘却せんとしてゐる。

かくて、敢て戦はずして済む對日戦を、自らの覺悟より前に戦はざるを得なくなると共に敗戦を豫想せる亡國的誇示に浮身をやつさざるを得なくなり、先師孫文が、救國の爲め巧みに利用したるソ聯政策を、自らの墓穴を堀る爲め自國の赤敗と極東の混亂の爲めに歓迎せざるを得ざるやうな最惡な事態を招來して了つたのである。

凡そ、自らの意志にあらざる戦争を惹起するほど愚なことはない。凡そ、勝味のない戦を挑む馬鹿はない。

然し蒋介石は、その愚舉を敢てしたのである。而も、東亞の和平を攪亂して了つたのである。

その原因は、身東洋の君子であり乍ら、歐米に身を賣る遊女となり、窮餘の末無辜大衆を赤衣に走らせ、尊き民族精神を赤色帝國主義の犠牲に供して了つたことに出發する。

彼の運命的事件であつた、かの西安事件の時、彼の明暗に起伏する生命の死活のスイッチ

を握つてゐたものは、中國共產黨であつた。又、この事件の收拾に、大暗躍をしたのは、英國であつた。

今日にして想へば、この時既に、蔣介石の運命は決定されて了つたのであつた。否、蔣の國民政府成立以來の歩みはつひにこの悲惨なる運命に没落する過程でしかなかつたのだ。一歩踏違へたる政治家は、國民を賣り、國家まで傾ける。實に怖るべき現實だ。

高度の資本主義の發達に依つて帝國主義に武裝された列強は、それ自らの矛盾を、中華に對する野心の達成に依つて解消しようとしてゐる。その主なるものは英國である。

ソ聯は、中華の混亂に乘じ、疾くより共產黨を培養し、機會ある毎に、そのトーチカ戰線を内部に伸長し、國民政府の奪取を謀つて來た。このソ聯に取つては、國民政府の昏迷は、中華の共產化と、極東の強豪日本の制壓の絶好の機會である。

蔣介石は、獨裁保持狂奔の爲めに、親善日本の誠意に敢て眼をつむり、野心的帝國主義と赤禍の侵略に、國土と大衆生活を犠牲に投出してつた。

而も、それに依つて、せめて身の安全でも得られれば兎に角、却つて彼の近側國民黨を危

地に陥入れ、自らの没落を招いたのみならず極東の平和に大きな暗雲を漲らせたのである。

日本は出發頭初から孤立であつて、その爲めにこそ却つて獨自の發展を遂げて來たのであるが、日本の、極東平和の大理想に對し、當然協力すべき中華なるにも拘らず、不可解なる抗日に依つて握手を拒み、益々日本を孤立に陥入れ、極東和平の到來を、最も必要なる時、一時的にもせよ遅延されたことは、蔣介石の大きな錯誤否罪惡である。

兄弟の親善を裏切る者こそ、自らの堀つたる穴に陥入る可きであらう。

しかし、悔悟は今からでも遅いとはいはぬ。

極東の平和を嚴守確保せんとする大人日本は、本來の目的成就の爲めならば、一時の盲狂を海容する位の大度はいつでも持つてゐるのである。

二

蔣介石の抗日は、歐米に對する遊女的身振を繰り返してゐるうち、いつの間にか深味にはまり込んだものと見なければならぬ。

歐米のユダヤ的パトロンの對する身振りとしての排日は、その身振りの激しさに依つて、國民を煽動し、煽動されたる國民の熱狂的猛火の壓迫に依つて、思はず抗日にまで進んで了つたのである。

今次の不祥なる支那事變は、蔣介石をはじめ、歐米ソ聯依存派要人の蒔きたる種の岡穗的成長の結果である。

政治家孫文に對して、軍政兩面の名將といはれる程の蔣介石のことであるから、國內の政情、財政經濟、軍備の階段の凡てを通じて、日本に敵せざる事は、いくら思ひ上つたところで、萬々承知の筈である。

それを承知しながら、軍政家蔣介石が、敢て日本と抗爭せざるを得なかつたところに、彼の心臓部の癌の發熱があり運命の悲劇がある。

そこで本當に戦はなくてもいい戦、本當に戦ふ筈でもなかつた戦を、戦はざるを得なかつたその戦ひ故に、凡ての點に於いて他人頼み運天まかせの長期抗戦の策戦の登場となるのである。

蔣の所謂長期抗戰なるものは、現在の中華の政情、財政經濟、第三國依頼外交等の全面的缺陷の證明の如きもので、而もその結果は、極東の和平を極度に惡化するものに外ならぬである。

蔣介石は、長期抗戰を宣揚することに依つて、國民の抗日を擴大強化し、その下から盛上る力を利用して自己に反對してゐる軍閥を壓倒し、多種多難な政情を整理しようと意圖すると同時に、その間財政經濟を巧みに糊塗し、併せて第三國の介入に依つて、自己に有利に戦局を結ばうと謀んでゐる。

尙これを、戰爭中心のみに見ても、彼の長期抗戰の略策は、たゞ日本皇軍に正面より太刀打出來ざる事を表明するのみである。

現代の戰爭は、資源總動員を背景とし、國民總動員を肉とし、國民精神總動員を血として人的動的大犧牲の下に行はるゝ尖銳科學戰である。

だから、中華の現状の如く、半植民地的、半封建的、帝國主義階段の弱體國家では、資源が幾ら豊富でも外國の控保的監理の下にあり、經濟が外國の眼の色に依つて動き、交通が外

國の支配下にあり、加之國民の動搖甚だしく、その愛國精神の不統一な上に、軍備が近代戰爭の條件を完備してゐない國家では、結局戦へば戦ふほど犠牲を多くするのみである。

恐らく蒋介石も推察してゐたであらう如く、あの貧弱なる經濟組織では、國運を賭けての戰爭は出来ない。既に、抗戰二ヶ月にして經濟的破綻を來したといはれてゐるではないか。

如何に支那がデマがうまくとも、鼻張りだけの強がりを云つてゐても、根本の經濟力の破綻は、如何に押匿さうとしても匿されない。疾うに窮民の暴亂化に表はれ、戦地の將兵の不平に如實に訴へられてゐる。

近代の科學戰備の全機能を擧げ、積極的抗日戰を戦ふ爲めには、先づ戰爭資源、國防産業が發達してゐなければならぬ。

然るに、中華には、科學戰に最も重要な重工業が殆どない。重工業のない國家が戰爭をするなどといふ事は、無暴そのものである。

このあたりにも、中華工業の半封建性を暴露してゐる。

中華に於ては、周知の實演の如く、飛行機、戰車、軍艦、大砲等は勿論のこと、その他近

代的武器彈藥燃料等は、外國から購入してゐる。自國にも、兵器廠があるにはあるが、日本を相手に戦ふ爲めには、餘りに貧弱である。

これを國防經濟方面から觀ると、中華の經濟狀態が、トラスト、カルテル等の未發達の爲め政府の經濟統制が不可能なところへ、半封建性と半植民地性の爲め大工業が少ない上に各種工場の戰時體制化が困難なるのみならず、農業の統制が不可能で而も交通不便と來てゐるから、近代國防經濟は殆ど成立しない。それに重壓的に列強帝國主義の支配が野心的に働いてゐるので、國防經濟の統制はこの點だけでも成立たぬ狀態だ。

かく國力の不充實、且つ戰時工業總動員が不可能のところへ、日本海軍の海岸封鎖、工業中心地帯の爆破の大打撃が深刻に加つて來てゐるので手も足も出ない形である。

其處で、已むを得ず「長期抗日」となつたものである。

この長期抗戰の意味は、國力充實、武器被服食糧充當、兵力強大の上の、さあ來れ、戰は何時まで續いてもびくともしないぞ、といふものではなく、甚だ心許なき、消極的逃廻り戰法なのである。

ゲリラ戰術などといふと天晴れなる戰略の如く聞えるが、實際は、この不充分なる自然資源を利用し、神出鬼没のうちに日本の疲勞するのを待たうといふものである。

且又、中華一流の策法に依つて、中華に深い利害關係を持つ英國を中心に、米佛その他を事變に介入させ、思想的に日本と對蹠するソ聯の鋒先を日本に向けさす可く計らうとしてゐるのである。

この誹謗戰術哀願戰法は、當該各國のそれぞれの利害に於て圖に當り、今や英國を中心に聯盟の二十五ヶ國諮問委員會の日本非難の決議となり、ソ聯の露骨なる中華外交の代表となり、戰備の積極的援助となり、米國の不満となり、獨伊以外の歐米諸國のチャーナリズムの輕卒なる非難宣傳となつて表はれた。

此の對日抗議及中華援助の狀勢は、今後も繼續されるであらうし、英、ソ等の出様如何に依つては、最惡の事態も想像される。

それは扱て、中華の長期抗戰は、その出發に於て、經濟的破綻を露出し、戰爭準備の不完全、從つてその不可能を證明してゐる。

然るにも拘らず、中華が、この戦術を採るやうな事があるならば、戦敗以上の破滅を招くものである。

必ずや中華は、英ソの思ふつばに陥り、経済的政治的に四離滅裂となるであらう。而してこの問題を中心に、東亞の平和は遠のくのみならず、世界を戦禍にさらすが如き惨事を惹起するであらう。

事ここに至んでは、蒋介石の罪責は、中華の滅亡に止らず地球を血に染めるものと言はなければならぬ。

三

中華の對日長期抗戦は、蒋介石の已むを得ざる戦術であらう。

だが、その戦術こそ、蒋介石は自己の没落の道づれに中華そのものをも引込むのである。

吾らは、中華と心からなる親善を望み、兩國協力して極東の和平の永遠を期せんとする者であるが故に、蒋介石のこの亡者の戦術に絶対反対するものである。

今次の事變に於ける中華の敗北は、科學が證明して餘りある。

しかし、その科學に明確なる敗北を知らながら、最後まで戦はんとする蔣介石の勇氣は壯烈なるが如くなるも、實は戦はずして止むべき戦争の爲め、國家を擧げての大犠牲を出し、つひには中華をして狼虎的野心國の餌食とし、極東の平和を赤色帝國の蹂躪、ユダヤの陰謀にまかすものである。

大義の國中華は、正義死し、徳道空しく、和平の望み斷へたるかの感が深い。兄弟の親愛の手に唾したる者の運命や知るべきものののみが知る。

果して然らば、長期抗日中に、中華に如何なる事態が起らんとするか。

歐米帝國主義は自己の野望に照し、日本又野望家ならんと誤認し、それと同時にアジアに生れたる新事態に敢て眼をつむりその帝國主義の矛盾の解消に性急の餘り、中華を世界大戦の戦火の巷と化すかも知れぬ。

少くとも、英米佛の中華に於ける權益が、中華の獨立を危ふくするまでに強化される事は想像に難しとしない。

猶、ソ聯は、中華の政治經濟文化の全面に涉つて進出し、中華を共產主義地區化すであらう。

かくて極東の平和は、極端に攪亂される。

この怖るべき事態は、決して假想でも恐怖の幻想でもなく、中華の足許にそく／＼と近寄つてゐる深刻なる現實である。

吾らは、この見透しの下に、血書して中華大衆に警告する。

蔣若し、中華の將來を思はず、亡國的長期抗戦に向ひ、益々中華をユダヤの餌食と化し、赤化の巢となさんとするならば、兄等は宜敷立つて、中華の悲運の挽回につとめよと。然らざれば、諸兄の中華は永遠に諸兄に歸らざらんと。

その道は唯一途あるのみだ。

即ち、速刻抗日の迂愚を排撃し、常に親愛の手を差伸つゝある日本の工作に協和し、抗日中華を餓鬼道より救ひ、極東平和の爲め立上ることである。

これこそ、眞の日華の地球上の宿命なのである。

支那の遷都抗日策をめぐる國際秘密力

1

北支の要人間に、親日新政權氣運が鬱勃として捲起らうとしてゐる時、抗日支那の首都南京は連戰連捷の皇軍の堂々たる武威に蹂躪されんとし、不安狼狽の極、つひに西方奥地の重慶へ遷都して了つた。

敗將蔣介石の必死の宣傳に依ると、この悲惨な段取りは、豫定の行動ださうであるが、蔣介石の論法を以てすると、最初から敗戦の覺悟を極めてゐたるが如くで又、その覺悟の最後の段階は、モスクワかロンドンまで遷都する豫定もちゃんと極つてゐるのかも知れないので

ある。

元來支那人には、頗る自尊心が強い割合に事大主義者が多い。蔣介石は、何も彼も豫定の行動だと云ふ苦しい自尊心で敗戦的面子のカモフラージュし、英ソの袖に縋つたのである。實際は、これこそ豫定の行動だつたのであらう。

抗日支那の遷都の原因と目すべきものに、大體四つの事情と、消極積極の兩面がある。

その第一は、言ふ迄もなく、日本皇軍の數と里程とを超越しての壓倒的勝利とこれに伴ふ經濟的困憊である。その二は、支那が生命の繩と倚賴した國際聯盟と九ヶ國會議の日本壓迫の無力の暴露である。國際聯盟及九ヶ國會議には、世界大戰を陰謀するユダヤ委員と、支那と深刻な關係に立つユダヤ人代表者が、略八割出席したに拘らず、正義日本に對し何事も爲し得なかつた。その効果は、藪蛇的に、日獨伊防共協定をコンクリートした事になつて了つた。

第三は、英國の蔣政權支援の老獪な策謀の結果であり、四は、コミンテルンと同體のソ聯の支那赤化のプランに依る長期抗戰の具體化の爲めである。

支那の最初の抗日作戰は、若し敗戦の場合は、陝西四川へ逃込み、長期ゲリラを續けて戦日本軍を經濟的に閉口させようと云ふものであつた。これは、中國共產黨が、支那の半封建的半植民地的事情から來る國防資源の非近代性を見透しから割出した案であつて、その裏に國民政府の共產化といふ陰謀の匿してあるものだ。

だが、蔣政權のバトロンのユダヤ國は、是に反對して、その案を、上海南京の金融中心地區を絶対に確保し、黄河右岸の線で日本軍と決戦せよ、と云ふやうに変更させた。この條件は、英國の財政顧問のリース・ロスが、支那の幣制改革をした時つけたものである。

けれ共、蔣介石の自軍の力の過信と、英國の誤算に依つて、黄河の決戦地も敗色に覆はれ上海蘇州既に陥ち、南京守備線も連敗を喫したので、共產黨のプランの如く、西部奥地へ遷都の已むなきに到つたのである。

然し、飽迄蔣政權を踊らせんとしてゐる英國は、蔣政權の傀儡に最も好適の場所にして、且つ、揚子江沿岸の利權を増大させるに最も好都合の所を選び、遷都せしめたのである。この重慶、漢口、長州、そして成都こそは、對日長期戦にも、又、英國の「南支政略」にも、

甚だ都合の良い所で、所謂和戰兩様の城塞なのである。

支那は、抗日に依つて亡ぶと云ふ事は、夙に日支の平和的識者の警告して來た處であるがそれにも拘らず、支那は泥土的抗日の中へ溺れて了つた。これ程、亡國的矛盾は無いが、今や支那は、大きな矛盾の底で跳いてゐる。

現下の支那は、驀に抗日一色に塗り込められてゐるが、それは二つの矛盾した方向に向つてゐる。その一つは英國の尻押しに依るものであつて、抗日一點張りの中心に、民衆の輿論を結びつけ、この焦點の熱度の中で地方軍閥、財閥勢力、思想團體を一樣藍色に溶かし、蔣政権の萬代を期さうとするものだ。他の一方は、中國共產黨、人民戦線を前衛とし、コミンテルンの指令を鵜呑みにし、抗日戦線の武装労働者農民を焦土抗日の中でその儘階級的、植民地的武装蜂起に轉換させ、支那を赤色動亂化さうとするものだ。

この二つの方向の異なるイデオロギーが、抗日長期戦の中に巢を喰ひ、蔣介石を右往左往させてゐるのだ。こんな矛盾が又と有らうか。

が、戦術家を以て自任する蔣介石は、右手で利權至上主義の英國と握手し、外交方面經濟

方面に利用し、左手で共產黨の武力を日本に對抗させようとしてゐるのだ。さすが手品のうまい國柄である。

乍然、この手品の種は、只の種でなく、雞卵實は蛇の卵で、これを遷都を中心に考察してみると、遷都自らが、手品師蔣が、兩手兩足を白禍赤禍の蛇に卷かれた事になる。

遷都は消極的作戰だが、遷都を勧告した英ソは、それぞれに積極的な陰謀を持つてゐる。就中、積極的なプランを藏してゐるのはソ聯であつて、抗日はやがて反英帝國主義に變るものであつて、支那は共產地區近くへ遷都する事に依つてソ聯年來の野望の、世界革命の犠牲とされて了ふ危険が頗る多いのである。

危ふき哉、抗日支那の遷都!! 長期抗日の冒險工作!!

2

支那に何事かの工作を施す者は、先づ地方的特色の研究をする必要がある。この研究ではソ聯が既に大博士の域に達してゐる。そこで出来上つたのが、かのコミンテルンルートだ。

この間、駐支ソ聯大使ボゴモロフが、レービン武官と一緒に、重要協議の爲めモスクワへ出掛けたが、大使一行を乗せた飛行機は、南京からソ支協定航空路の起點漢口に向ひ、一九二七年に赤色武漢政府のあつた空を翔び、この間張學良が周恩來らと組んで、蔣介石に容共抗日戦を押つけた陝西省の西安に出で、甘肅省の蘭州、涼州、嘉峪關、安西、それから新疆省に入つて哈密、迪化を飛び、あれから阿塞からソ領へ入つたのであつた。

この航空路は、トルキスタンから、支那赤化の根據地新疆省の迪化へ出で、甘肅省を横斷して陝西省に入り、南北支那のコミンテルン・ルートの空を翔ぶもので、鐵道のトルクシブ鐵道——新疆——蘭州線、蘭州——外蒙線と共に、對日軍事上重要なものである。

中國共產黨は、一九二七年の國共分裂の際、一應國民政府及南北重要都市の赤化を中止して、地方に勢力を扶植せんとし、南支の江西、福建地方に、その中心地區を作つた。かの廣東、潮州間の陸豐、海豐に仕掛けられた赤火は、朱德、毛澤東、徐向前、賀龍、林彪、周恩來らに依つて福建省、江西省、浙江南部、安徽省、湖北省、湖南省へと伸びて行つたのだ。かくて最近迄のコミンテルン・ルートは、バイカル・アムール鐵道に依りゴビ砂漠を突破し

て、南部外蒙國境を経て西部綏遠省を通じて、山西省の陽平太原に達するもの、イルクークから庫倫に出で、こゝを中心に張家口、天津に達するものと、庫倫を中心に寧夏を経て蘭州に達し、西安、延安を通じて、洛陽、漢口、長沙、重慶、成都を外形につなぐ線があると云はれてゐる。

皇軍の進撃に依り、内蒙、天津、太原の線^{ギト}を切られたコミンテルンが、中國紅軍の根據地蘭州から南方奥地、新首都方面へ延びるルートを、益々強化せんと努力する事は想像に餘りある。

このコミンテルン・ルートを、遷都地域と結び合はして觀ると、ソ聯及中國共產黨の對日策、全面的南支赤化策が窺視出来るのである。國民政府は、抗日戰慘敗の結果急遽遷都を決し、重慶を首都に、漢口、長沙を政府機關の分派地と極めた。此のアミーバ的遷都様式は英國の利權擁護の策略から出たプランであらうが、この分裂せる首都こそは、英國のロボツト蔣介石對共產勢力及白崇禧宋子文プラス英國の姿を、如實に表現するものである。

ソ聯に取つては、支那の敗戦は、却つて赤化の乗ず可き機會であつて、この遷都の長期デ

リテ抗日戰こそ、焦土支那動亂支那の無殘を實現する待望の好機であると共に、コミンテルン・ルートを南支中央支那に秘設する無二のチャンスなのだ。

故に、早くも孫科、于右任らの親ソ要人は漢口に逃出し、郭沫若、沈雁冰、王造時、朱白清らの人民戰線派の宣傳部員が、廣東をその抗日宣傳本據となす可く、香港に待機中なのである。

支那は、コミンテルンに操られ、混亂すればする程、コミンテルン道路は、蜘蛛の巢の如く張り廻されるのである。

3

英國は、現下の利權擁護に汲々としてゐる。尙、英系ユダヤ財閥は、支那投資五十年計畫を樹て、事件前から積極的に乗出してゐる。

英國は、利權漁りでは、頗る狡猾老獪であるから、蔣政權が頼りなければ宋子文を使ひ、宋が頑張りが利かなければ、白崇禧を起用する。若し、白崇禧でも、對內的對目的に不可な

ければ、知日派の汪兆銘だらうと、時には共產黨とも組んで、自國に好都合の政權を確保せんとするに相違ない。

最近蔣介石の大量的慘敗と國內不人氣とを觀て取つた英國は、俄に對日政策を軟化して來たと云はれるが、たとへ外交は軟化したやうに見せても、利權擁護は絶対に止めないのである。

否、それどころか、共產黨と同じく、支那の存亡如何に拘らず、遷都の意味を、自國に有利に擴充せしむる事は火を賭るよりも瞭かであらう。

英國の利權擁護ルートは、香港から廣九鐵路で廣東に至り、こゝから粵漢鐵路で長沙を通じ漢口へ延びてゐる。又、上海附近には、京滬、滬杭甬、滬淞の各路を確保し、尙、支那の港や江河に略百二三十億噸の船舶を活躍させ、十五億の運輸事業を行つてゐる。

又、英國は、緬甸鐵道を、雲南、貴州、湖南、江西、浙江の各省を貫く大南支鐵路にまで延長させようと計つてゐる。

この南支を貫く大鐵道こそ、英國の揚子江すちの大野心を表明するものであつて、分散的

遷都の重慶、漢口、長沙の經濟的、政治的、軍事的 중요さと思ひ合はすと、英國の野望の果しなき深刻さが割出され、轉た戰慄を禁じ得ないものがあるのである。

而も、度々長沙遷都の噂があつたにも拘らず、こゝには交通と實業を置き、敢て上海より二千百キロの重慶に首都を持つて行つたのは、皇軍の猛威に對する防備からでもあるが、英國の野心が、貴陽⇩重慶⇩成都にまである事を、物語つてゐるのである。

英國が、粵漢線中心の策謀を爲し、長沙に於て交通、實業兩部を運轉し、漢口に外交、財政、内政の三部を置き、重慶に五院を假設したなどは、英國の對支政策の將來性が窺はれ、却々拔目がない。

蔣介石が、連戰連敗の上に、心臟部上海を失ひ、頭部南京も失ひかけてゐる今日では、せめて肺臓と胃腑だけで生きるより他に道はないのだ。

又、南京の大本營及軍事機關に、蔣とその一黨及政學系と多少の知日派を残して置いた策は、この際軍事的には無力な英國が、蔣の最後的手腕を試みると共に、既に對日經濟封鎖や反日ポイコットも困難になつた今日、外交手段の捨石を残したものだ。

従つて、この遷都で、一番忙がしくなるのは、香港と廣東だ。

香港と廣東と並び、即ち共產黨と、英國とが、對日策を練る姿は、支那そのものの如く矛盾の姿であると同時に、英國の極東侵略の悩みが、しみ／＼と觀察されるのである。

心ある支那民衆は、遷都宣言中にある如く「舉國一致領土主權の擁護の爲め」香港から新首都に向つて放射される白色怪光に留意をしなければならない!!

4

遷都重慶は、春秋時代の巴國の都した所で、今日では巴縣と稱され、市街は揚子江と嘉陵江に半島狀に突出し、人口三十餘萬を有する揚子江上流の大貿易港だ。

自然的に三峡の嶮で別天地を成してゐる上に、成都に水陸の便があり、貴州には自動車路が通じ、漢口上海とは河川の便と、航空路がある。目下成都漢口をつなぐ鐵道が、英國資本ですゝめられてゐる。コミンテルン・ルートは、西安からも湖南からも延びてゐる。

抗日支那及英國に取つての重慶の重要性は、揚子江上流の物資集散場である事と、成都へ

通じてゐる便益と、軍事上の要害を爲す事とにある。殊に、河南湖北湖南の横線はゲリラ戰術線である。

長沙は、粵漢鐵道の重要地で、水陸の便の縦横の貿易港で燐寸アンチモニーなどの工場もある商工の市だ。人口五十餘萬を有し漢口を通じて盛んに外國貿易が行はれてゐる。軍事的には、山岳の守りあり、河川鐵路の交通が發達し、さすが湖南省の首府で秦漢時代から巨城のあつた處だけに、市街には堅城を環らし城外にも頑強な防備がある。

抗日支那が、粵漢線に依る香港からの軍事後援を頼み、この英國利權線インパクトの確保に狂奔してゐる姿は、目に見えるやうだ。上海、南京を失つた英國は、この長沙と漢口とに依つて自國の立場をより良く盛返さうとしてゐたのだ。

コミンテルンは、既に漢口武昌、南昌、長沙のルートを秘設してゐる筈である。

漢口は、佛山、朱仙、景德と共に支那四大鎮の一つで、水陸交通の要衝であると共に、商港とし將又將來の工業地とし、軍事上國際外交上の要地として首都的價值のある處だ。

此處は、漢口特別市といはれ中央政府行政院の直屬だ。人口は武昌と合せ百七八十萬ある

第二の上海だ。

漢口は、孫文の第一革命以來屢々交戦のあつた處であり、又、中國反帝史ストライキ史共產主義史上、廣東と共に大きな役割を遂げてゐる處だ。就中、大正十四年の第一次漢口事件をはじめ、反英反日の運動の激しい市だ。

英國は、漢口に、平漢、粵漢の鐵路を確保し、揚子江漢水に、自國艦船を泛べて、巨大な貿易を行つてゐる。揚子江沿岸の資源は、全部こゝに集つて來り四散されるが、今後はより多く粵漢鐵路が頻繁に活躍し、九省の會といはれる中、南、西部の資源が香港に積出されると共に、抗日武器が、破れた鐵路を繕ひつゝ運び込まれる事であらう。

以上は、遷都地區をめぐる、英國ユダヤ閥の野望とコミンテルンの意圖の一部を書いただけであるが、英國に縋りつき、長期抗日の夢を抱いて奥地遷都を敢行した蔣介石はじめ抗日支那こそ英ソのわなに掛り、經濟的に政治的に思想的に、焦土にまで喰ひ荒される結果を見るのである。

我等は、善良無辜なる支那國民に滿腔の同情を寄せると共に、黃色支那を、白色或は赤色

ニダヤに賣らんとする抗日支那の速やかなる愛國的覺醒を熱望する者である。

支那よ、祖先の地圖を穢してはならない。

アジアを攪亂する猶太人

昭和三十三年十二月八日 印刷
昭和三十三年十二月二日 發行

定價八十五錢

著者 井 東 憲

發行者 橫 田 博

京市小石川區稻谷ヶ町九番地

印刷人 小 泉 輝 章

東京市小石川區柳町二四番地

印刷所 小 泉 印刷所

東京市小石川區柳町二四番地

發行所 雄 生 閣

東京市小石川區稻ヶ谷町九二番地
振替 京八三一四一番

發賣所

東京堂 東海堂 北隆館
大東館 栗田書店 大阪・新正堂

國際思想研究所譯著

(最新刊)

英米露に於けるユダヤ人の策動

世界に分布するユダヤ窟の網細胞は支那事變を契機としてその後豫想さるゝ日英・日ソ國交關係の緊迫事態に飽くなき蠢動を續けてゐる！

イギリス系のユダヤ財閥が、敗戦國支那の財閥を支配してゐる間は將の白日夢はさめない。敗戦を認める蔣が長期抗戰を豪語するのは背後にユダヤが秘んでゐるのとフアツシズムに對抗するソ聯ボルシエヴィズムのユダヤ魔が限りなき赤手を延べてゐるからである。この意味に於てユダヤを研究することは戰事態制下の我が國民の緊喫事であらねばならぬ。

本書重

要目次

- 第一章 總論
第二章 ユダヤ民族の現状
第三章 米國に於けるユダヤ勢力
第四章 英國に於けるユダヤ人の現状

- 第五章 世界ユダヤ人大會
第六章 ソ聯邦とユダヤ人
第七章 ソ聯邦ビロビジヤ猶太自治洲

閣生雄 發行所

振替東京三八一四一 番

四六版

百二十六頁

定價七十錢

送料六錢

